

## アッシジの聖フランシスコ

### はじめに

6月にイタリアに旅をして聖フランシスコのゆかりの場を訪ねその生涯を深く知りたいと思いました。聖フランシスコの研究は夥しくあり、日本でも大正時代から始まっており先駆者は宗教学者の姉崎潮風です。彼は聖フランシスコの性格を次のように喝破しています。「彼、聖フランシスコの人物は一言にして尽くせば天真爛漫、小児の如き心をもって一生通した人である。身を神に任せようとした時、親の怒りに触れて着物をも脱ぎ捨て丸裸になって己の信仰を貫いたその心は清さにおいては小児の心であり、強さにおいては偉人の精神である」

天国に入る幼子の心をベースにして「俗」から「聖」を時間をかけて転換していく過程で揺れ動く心理が24歳（1206年）から27歳（1209年）にかけて観察することができます。

フランシスコは民族、国家、文化、宗教、思想、時代を超えて多くの人の心を惹きつけ、尊敬を受けています。清貧の精神は日本では「捨」の精神に通じる部分もあり、それがほぼ同時期に生じている歴史における同時性として興味深いものがあります。日本では浄土宗の開祖法然（1133~1212）、臨済宗の栄西（1141~1215）、小鳥に説教をしたと言われる明恵（1173生）が1206年に京都の高山寺を建立しています。親鸞（1173~1262）、道元（1200~1253）、日蓮（1223~1282）の活躍があります。特に「捨てることは任せること」と行動宗教の時宗の一遍（1239~1289）との同時同質性が見逃せないところです。

### フランシスコの時代背景

フランシスコが生きた12世紀末から13世紀初めのアッシジの政治情勢を簡単に考察します。

「覇権争いが非常に過酷であり、復讐のメカニズムが街の通りや広場を内戦特有の空気で重苦しく覆っていた」

とあるように同じ街アッシジに住む人々の間に対立の要素が持ち込まれていました。それは4重の円を画いています。①第一の円はマヨールス（貴族、高位聖職者）とミノールス（農民、商工業者、下級聖職者）との対立です。これに貴族間の門閥争

いが加わり内乱が起こります。②この対立は近隣都市間の封土（領地）の支配をめぐって争われる衝突（経済戦争）に利用されます。③この二つの衝突をより複雑にしたのが当時の神聖ローマ帝国とローマ教皇との戦いでした。アッシジはプロバンス地方との経済取引が活発になり商人（ミノールス）が力をつけ帝国から自治を取り戻すべく12世紀後半から争いを始めていました（1198年）ミノールスの台頭に脅威を感じたマヨールスは帝国派になり（現状維持、保守派）、ミノールスは教皇派にならざるを得ません。このようにして外国との戦いが内戦を引き起こします。アッシジではミノールスの力が強かったために、マヨールスであるアッシジの貴族たちは皇帝派の都市である隣のペルージャに助けを求め避難をします。ペルージャは皇帝派であったので避難を受け入れ、アッシジとの戦いで貴族の復讐心を利用します。こうして1199年アッシジとペルージャが戦うことになりました。

イタリア半島はこのようにして神聖ローマ帝国派とローマ教皇派が縞模様に対立する構図がつくり出されてきました。ここまではキリスト教国同士の戦いですが、④国際的には十字軍の派遣によってキリスト教国とイスラム教国との戦いが1096年から始まっており1270年迄の8回も無謀且つ無益な争いが続きました。聖フランシスコも聖クララもこのような戦火の中から平和を叫んでいたのです。フランシスコは第5次十字軍（1217年～1221年）にある目的をもって加わりました。

十字軍に加わる時は国内の敵同士が仲間になり新たな敵を作り出して戦いが始まります。この時代も今も変わりません。戦いは敵を必要とします。敵があるから戦うのではなく戦いたいという人間の欲望が敵を必要とするのです。戦いたいという人間の権力欲と攻め込まれて「相手から軽視された、無視された」というデスカウントから芽生えてくる復讐心が新たな戦いを創造します。

このような情勢の中で、成り上がりの放蕩息子が突然、すべての財産を放棄して、家々を訪問し「あなたの家に平和がありますように」と告げ始めたのですから人々は驚き、呆れかえり、バカにします。然し、平和を求める潜在的な同調者は多くいて、財産を売り払い貧しい人々に寄付する弟子が増え始めます。そればかりでなくローマ教皇側にも賛同者が現れます。「太陽の賛歌」に至り着くフランシスコの生涯は今のわたしに語りかけます

## 両親

父ピエトロ・ディ・ベルナルドネは絹と毛織物の商人  
織物は最も交通量の多い街道に沿って取引され、ヨーロッパ中を網の目のように張り巡らしていました。国境というものがまだなかった時代でアッシジの平野を通る街道は「ヴィア・フランチェスカ」＝「フランスに向かう道」と呼ばれていました。彼の商取引の範囲もウンブリアと南フランスでした。彼はアッシジに自宅と店を構え、町の外には工場を持っており、広大な農園を有していました。

彼がプロバンスに商用で出かけていたとき、美しく、信仰心の厚い、優しい女性ピカと出会い結婚しました。

## 誕生から15歳

### 1182年

1182年9月26日フランシスコ誕生間もなく、母はサン・ジョルジュ聖堂で幼児洗礼を受け、ジョバンニ（洗礼はヨハネ）と名付けました。夫は商用で留守でした。妻は「この子は宗教の分野で何か偉大なことをすると感じたので、この洗礼者ヨハネと主が愛されたヨハネの霊名をつけた」と説明しました。夫は息子を一角の商人とし貴族へ影響力をもつように育てたかったので、この名には反対し「フランシスコ」と改名させました。

幼少時代、フランシスコは裕福な家庭で、すくすくと育ち、素直でのびのび、単純自由闊達に育ちました。母はプロバンス地方の歌や騎士の英雄伝も聞かせました。宗教的荘厳さがある歌も聴いて育ちました。身分は商人でしたが、貴族の子弟のように育てられました。

### 1190年（8歳）

1190年（8歳）サン・ジョルジュ聖堂付属学校に通い始めます。主要な科目は宗教でした。祈りが教えられ、聖書が暗記されました。（フランシスコの聖書の読みは鋭く深い。その原点はここにある）幼年期には十分な教育がなされ、特に詩的能力に長けていました。仲間作りの才を天から受けており、みんなをリードする力を発揮し、特に上長の者の人びとの言うことを聞き、指導するすべを心得ていました。

### 1194年（12歳）

1194年（12歳）学校を終えて、父親の商売を手伝うようになります。顧客の対応力は父親にひけをとらず商人としての才を発揮していました。父はそのような我が子を誇りに思いフランスへも連れて行きその見聞を広めさせ、「この子は世界一の商人となり、貴族たちも彼の前では頭をさげるだろう」と言っていました。母は「恩寵によって、きっと神の子になる」と仲間の夫人たちに言っていました。

「聡明さゆえに快活な青年となったフランシスコは父親の職業である織物商を始めていた。しかし、そのやり方は非常に異なっていた。フランシスコは陽気で気前がよく楽しいことや歌うことが好きだったため、昼も夜もアッシジを友人の一団と歩き回っては豪華な食事や遊びに、稼いだお金や有り金をすべて使っていた。商人の子というよりも大公貴族の愚息のような行きすぎた浪費を両親は何度も注意した」

（三人の伴侶の伝記・ベラルド・ロッシ著「聖フランシスコをその時代」サンパウロ刊）

1197年（15歳）城壁築城に参加。自治都市アッシジの市民は外部からの侵入を防ぐために城壁を造ることになり15歳の少年も参加。フランシスコはここで手で城壁を造る技術を覚え、後の教会修復に役立つことになりました

## 内乱に巻き込まれる青年時代

1198年（16歳）

### (1)アッシジの内乱に巻き込まれる

1174年アッシジはドイツ皇帝（神聖ローマ帝国）のイタリア政策によって占領下におかれますが、3年後にはドイツ皇帝軍と戦い自治を獲得していました。ドイツ皇帝は「神聖ローマ帝国」と呼ばれるにふさわしくローマのあるイタリアを支配下にする野望を持っていました。（ローマは永遠の都の象徴であり続けているわけです）

ドイツ皇帝に支配されると困るのがローマ法皇です。この頃ローマ法皇は世俗における権力を拡大し、又他の国を動かして聖地エルサレムを奪還するという大義名分を与えて十字軍を編成させる等、巧みに戦争を各地で仕掛ける力を持っていました。教皇イノセント3世が選ばれれば教皇の力が至高であると宣言しました。

この時代、封建制が確立し、社会には厳しい身分制度があり、マヨールス（より大きな者＝王侯・貴族・高位聖職者・騎士）と呼ばれる上流階級とミノールス（より小さな者＝下級聖職者・農民・職人・商人・農奴）と呼ばれる庶民階級に分かれていました。商人の中にはフランシスコの父のように貨幣経済の発達によって富を蓄積できるようになったことを契機として財力を持ち、地元では政治的な影響力も持ち、上流階級を志向するものが現れました。

イタリアの諸都市はドイツ皇帝の支配下にいるよりも自治権が獲得しやすい法皇につく方が有利であると考えた法皇派と現状を維持しドイツ皇帝の支配下に留まることを志向する皇帝派に分かれました。競争の原理が働いたのかどうか、又は人為的であったかどうかは分かりませんが、隣接する都市は概ね対立構造になっていました。

アッシジは法皇派が多数であったのでドイツ皇帝と戦って1197年には皇帝派の見張り台ロッカ・マジョーレを占領し破壊し、その勢いで外部からの侵入を防ぐ防壁を造りました。然し、少数のマヨールスに属する人は封建制を維持するために（自分の今の位置や権力を守るために）自治を欲せずドイツ皇帝派に留まろうとして、アッシジの街の中でも二つの勢力に分かれていました

この二つの勢力争いが原因で内乱が起こります。

マヨールスの人々は隣接都市ペルージャに亡命します。ペルージャは皇帝派で喜んで亡命者を受け入れました。

この中に裕福な貴族の子女であったクララ一家がいました。

フランシスコ（16歳）は平民側にたって戦いました。民衆は暴徒化し城壁を略奪し破壊し、城壁は炎に包まれ、轟音とともに崩れ落ち、近隣の民家は地震に遭ったように振動しました。人の波が叫び声をあげながら麓から山へと登っていきました。炎と煙が黄昏れ時のスバシオ山の横腹をなぞっていきました。それはまるで腹をえぐられた人のようでした。フランシスコは生地アッシジの友人や子どもたち、男や女たちが死んでいくのを見て、暴力のなんたるかを知り、負傷した身体の一部を失う恐怖を味い、この日のことは忘れることはなく平和を希求する種を宿しました。

## (2)商売上での出来事

「ある日、織物を売ろうと店に居たときのこと、一人の物乞いがやってきて、神の愛によって恵みを乞うた。ちょうど、店の中で忙しく客の相手をしていたフランシスコは、いらいらして、うるさい、あっちに行けと追い払ってしまった。けれど、物乞いの姿が見えなくなるや、彼の良心は責められた。『ああ、もしあの物乞いが、偉大な侯爵か伯爵の名を以て助けを求めていたならば、あんなふうには追い出しはしなかつたらう。それなのに、ましてや、王の王、万物の主である神のみ名によって、施しを乞いに来た者を、わたしは追い払ってしまったのだ』「この時から彼は『神の愛によって』と言って施しを乞いに来る者には、決して拒むまいと、心に固く誓ったのだった。実際、商人であったにもかかわらず、金銭を浪費する弱さが彼にはあった」（三人の伴侶の伝記・ベラルド・ロッシ著33p）

このことは後に「悔い改め」を厳しく説く原点となっているかも知れません。

然し、友人との遊興、金銭の浪費は続いています。

## 1200年（18歳）ペルージャとの戦いで捕虜になる

内乱後新しいアッシジの行政官たちはなすすべもなく町が荒廃するまかにまかせていました。ミノレスが優勢になったものの統治能力がなかったのです。ここでイノセント3世が動きます。ペルージャには自治都市を認めましたが、アッシジには認めず「教会禁足令」を出しました。それは聖堂の閉鎖と秘跡の授与及び民衆のためのミサの禁止でした。この時代の人びとにとっては食べ物以上に大きな打撃となる処置でした。この教皇の措置はアッシジからペルージャに避難していたマヨレス達の復讐の願望と一致してペルージャがアッシジに戦いを仕掛けました。フランシスコも戦いにでますが、権力の最盛期にあったペルージャに敗北し、多くの人びとに混じってフランシスコもが捕虜となりペルージャの市民庁舎の暗い地下牢に鎖で繋がれたました。

## 1201年（21歳）

11月捕虜となり牢獄での生活が始まりました。

## (1)牢獄での振る舞い

①多くの人びとは「鎖」に悩まされ「悲嘆にうちに死んでいった」とある中で、フランシスコは低い天井の中で鎖に繋がれていても、声を高らかに歌い、踊り、それを馬鹿にする捕虜の人々に「君たちは僕が将来何になると思う。そのうち、世界中が僕の前にひざまずくだろう」と苦難のただ中であっても希望を語る力を示していました。この姿勢はオーストリアの精神科医、心理学者、『夜と霧』で知られる。ヴィクトール・エミール・フランクル (Viktor Emil Frankl、1905年3月26日 - 1997年9月2日) を思い起こさせます。

### ②高慢な騎士との付き合い方

「牢獄の中には、我慢できない高慢な騎士がいた。みんなは彼を避けていたが、フランシスコの忍耐は屈しなかった。扱いきれないその人と、何度も耐えて付き合っているうちに、とうとうみんなとの間に平和が回復した。その当時から、彼の魂はあらゆる恵みを受け入れることができた選ばれた器として、そのカリスマを周りに降り注ぐのである」

## (2)病気にかかる

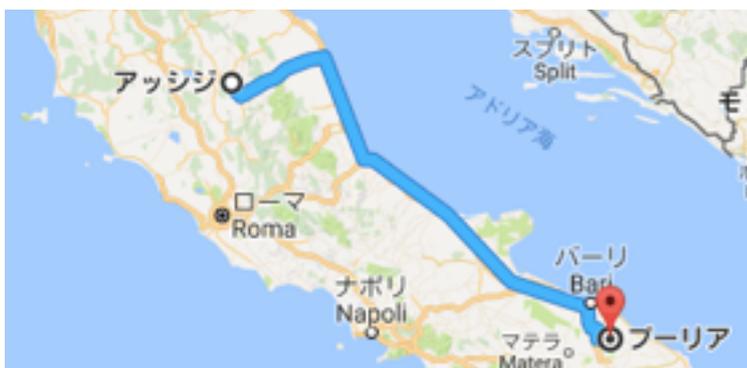
牢獄の不衛生な環境、食糧不足の生活、不自由な空間で結核性の病気にかかります。この病気は生涯つきまとい最後の肉体的な苦痛を大きくします。

## 1203年～1204年 (22歳)

父が身代金を払って解放されて自宅に戻りますが重い病の為に外出ができず、両親の手厚い看病によって1204年の終わり頃、やっと杖をついて家の窓辺に立つことができました。ペルージャでの戦争で受けた打撃と病気の辛さは忘れられない体験となりましたが、天性の明るさ陽気さは、再び若者たちとの交わりで気前よさと寛大さで「貴公子」のようになって騎士への憧れが強くなってきました。

## 1205年 (23歳) 騎士になることを夢みて再び戦場へ

1205年、ブーリア地方の戦争に出向く



➔ (586.8 km) 「E55」 経由

この戦争も皇帝と法皇の戦いの一環で、皇帝の後継者問題で争いになっていた。敗戦を重ねていた法皇は、シチリアの豪放な武人ド・ブリエヌ (シチリア王ルッジェーロ二世の孫) に助けを求め、戦いを優勢に導いた。この噂がアッシジにも伝わった。フランチェスコの胸は再び躍り

上がり、「僕はこんど偉い殿様になるんだよ！」とはしゃぎまくり、ド・ブリエンヌ（教皇が雇ったシチリアの勇士）に認められ騎士になろうと決断し、武装の準備を始めた。その武装は「独特で高価」豪華すぎて、父親ですら「それは誰が見ても商人と思われる姿ではない。身分の高い騎士の姿だ」と半ばあきれかえったが、自慢げでもあった。

喜びの幻想に勇んで故郷を出発しましたが、約50kmのスポレトで熱病にかかり寝込んでしまいます。する

と「どこへ行くつもりか？」と尋ねる声を聞いた「プーリア（十字軍が参集していた）へ行って騎士になるつもりです」と応えた。その声は再び尋ねた「フランシスコよ！主人と召使いはどちらが大切か？」彼は「主人で



36分 (46.3 km) 「SS75 と SS3」 経由

す」と答えた。「それなれば、何故主人を捨てるのか」の声に、彼は戸惑い「私に何をすることをお望みでしょうか？」と問いかける。声は「直ちに故郷へ戻れ、なすべきことはそこで示されるだろう。お前のみている幻は考え直さねばならないのだから」そこでフランシスコは目を覚ました。一晩中眠れなかった。朝になるとやおらおきあがって、馬に鞍をおき、今やたちまちむなしく思われた武具を身につけ、アシジに帰った」（ヨルゲンセン著p27)

この銅像は今、大聖堂へ向かう道端にあります。立派な武具と馬が哀しげに立っています。

大変な疲労で数日間寝込んでしまいました。母はそれが後遺症のためか新しく生じた心の病の前兆かの見分けがつきませんでした。

フランシスコの胸は夢の中で自らが発した「主よ、何を御望みですか」との問いに戸惑っていましたが、同時に誘いに来る友人との交わりにも未練が残っていました。

## 1205年（23歳）最後の饗宴

この複雑な思いを晴らすためにフランシスコは再び、すぐに陽気な友達のサークルの中心となっていき前にもましてお祭り騒ぎに興じ、饗宴の王を演じる程になりました。プーリアへの出征の失敗を質されると彼は「自分の国で大きなことをするためだと自信たっぷりに答えた」(6)p28

又しても元の木阿弥かと思われましたが奇妙な変貌が現れました。

1205年の夏のある晩、彼は盛大な宴会を催しその主賓となって、集った友から讃辞と感謝の歌をあびた。それからいつものように列をなして、通りを歌いながら歩き回った。だが、フランシスコは列から少し遅れ始め、歌も歌わなくなった。ますます遅れ、小さな広場にひとり取り残されてしまい、恍惚として、気を失ったかのように棒立ちになった。どれだけの時間がたったか彼は覚えていなかったが、友達の一人が彼を探しに戻ってきた。友人は「おい、フランシスコ、そこに突っ立って、結婚のことでも考えているのかい」と呼びかけた。我に返ったフランシスコは「そう、結婚しようと考えていたところだ。でも、ぼくの求婚しようと思う花嫁は、  
(この世でもっとも高貴で裕福で美しい) 君たちの知っているどんな女性より、気高く、金持ちで、美人だ！」戻ってきた友人数人が「じゃあ、プーリア行きの時みたいに、仕立屋が忙しくなるかな」とからかわれた。

三人の伴侶の伝記によると (この世でもっとも高貴で裕福で美しい) とは清貧に富んだ、高貴で美しい修道生活を意味しています。

この時から彼は自分をみじめな存在だと感じ始めた。おろかさ、無計画さ、子どもっぽい虚栄心、道化が自分への深い嫌悪と感じはじめた。自分自身に腹立たしさを感じ軽蔑さえした。

「夢に敗れ、希望に裏切られて後にやってくる青春の午後は静かな瞑想と反省のときだ」(武田友寿著p132)

逆戻りしないためにどうしたらいいか？孤独、瞑想、祈りの生活が始まりました。そして、友を離れ、殆ど毎日隠れて祈りに没頭し、しばしば、神秘的な甘美さが彼の魂に浸透し、広場であろうが、群集のまっただ中であろうが、祈りを抑えることができませんでした。心に信心への思いが湧いてくると行動も早い若者はアッシジの聖堂を訪れました。

自分が今までにしてきた貧者への寄進について考え、見栄っ張りの寄進もあったと反省する。「貧しいというのはどんなものか、通りすがりに小銭を投げ与えられる、ぼろをまとめて施しをうけるとは、いったいどんなものだろうか」を体験したくなった。ローマに向かいます。

## ハンセン病患者に接吻する

1206年 (24歳)

(1)春頃、ローマに向かう

主の声に従って故郷に戻ったものの「何をなすべきか」に答えられず、饗宴にも楽しみは見いだせず嫌気がさす、心のもやもやに居たたまれなくなり、自分探しにローマに向かいました。

ペトロ大聖堂に入り、献金している人のけちくさに合点がいかに、大金を投げ込んで周りの人を驚かせた。その瞬間に、激しい心の痛みが走った。深い反省、心のうずきの「悔い改め」の道が見えてきたのであろうか。彼の心が勇者になった。本物の乞食を捕まえて、そのぼろの服を借りまとして他の乞食にまじって聖堂の前の石段に立ち、フランス語で施しを求めた。ボロを着て施しのパンを食べた。「主よ、あなたはわたしに何をお望みですか」その答えはローマでは見いだせなかった。

ローマから戻り祈っていたとき自分に刺さっていた一つの棘に気づいた。アッシジには2カ所のハンセン病の施設があった。その一つは彼の生活圏（アッシジとポルチウクラの間）にあり、いつも目をそむけ、出来ることなら避けて通っていました。ハンセン病患者以上の貧者があるだろうか。ハンセン病人は中世人の慈善の最大の対象でしたがフランシスコは強烈な嫌悪感をいだいていました。そのことに気づき今度は大きな罪悪感を持つようになりました。

ある日「いつものように神に呼びかけると、答えが与えられた」『フランシスコよ、わたしの意志を知りたいならば、心が愛し望んでいたものをすべて軽んじ、憎まねばならない。そうし始めたら、前には快く好ましかったものはすべて耐えがたく、苦々しくなるだろう。だが、前に嫌っていたものすべて、お前にはとても快く、あふれる喜びとなるだろう』（ヨルゲンセン著p37）

ついにこのことばで、歩むべき道が示されました。

## (2)ハンセン病患者への接吻

ある日のこと乗っていた馬が騒いだので、はっとして物思いから目覚めると、十歩か二十歩ほど前の所に、それとわかる特別の服を着たハンセン病人が立っていた。フランシスコはびっくり、馬もそうだが、彼自身がとっさに、できるだけ早く逃げようとした。すると、心の中で聞いていた「前にこわがったことは、お前の甘美な喜びとなるだろう」ということばが一挙に眼前にあらわれた。ハンセン病人ほどこわがっていたものがあるか。だから今こそ、主のことばに従って——自分の善意を示すときなのだ

ぐっところえ、フランシスコは馬から飛び下り、病人に近づき、差し出された半ばくずれた手に施しを与え、かがみこんで、むかつきそうなのをこらえ、傷や潰瘍におおわれた指に接吻した。彼はまた馬にまたがったが、どうして乗ったのかも、殆どわからなかった。気が動転して、心臓は早鐘を打つようだった。たどった道もわからなかった。だが、主は約束を守られた。甘美な幸せと喜びが、心に流れ込んだ。心はとうに満たされ、あふれ、この流れはやまなかった。

聖フランシスコが遺言に残したこの時期の報告は「主はわたしの改心の手始めとして、罪深い生活を続けている間には、わたしがハンセン病人を診るのがとても辛い

よくなってきた。ところが、主はわたしをハンセン病人の間にお導きになり、わたしはそれを手当した」（ヨルゲンセン著p38）

それから以前に辛く思われていたことが、魂とからだの甘美に変えられたのでした人間の得られる最大の勝利を、自己自身への勝利を得たのです。この時か自分自身の主人となり、自分自身の奴隷（わたしたちのたいていがそうであるように）ではなくなった」

それ以後、フランシスコはハンセン病患者たちと友達になり、生活圏にある三カ所の隔離病院をしげく訪問しました。その道筋に荒れ果てたサン・ダミアノ教会があり、そこに入り祈っていました。

「主よ語ってください。あなたの僕が聞いていますから」

「ああ、いと高く、栄えある神よ。わたしの心を照らしてください。わたしがあなたの掟を守れるように、真っ直ぐな信仰と確かなる希望と完全な愛と深い謙遜と、思慮分別と感謝の念を与えてください。アーメン」と祈っていました。

主のことばがあった。「フランシスコよ、わたしの家が壊れかけようとしている。さあ、行って、わたしのために修復しておくれ」

若いフランシスコは答えた「主よ、喜んでいたします」フランシスコの心は喜びの光で満たされ直ちに行動を開始した。

彼はその時、持っていたあり金全部をサン・ダミアノの老師祭に寄付しようと申しした。

「どうぞこのお金で油を買い、十字架像の前の常明灯を欠かさず灯しておいてください。油がなくなったら、またそう言ってください。なんとかいたしますから」

（常明灯は今も周囲の4つの町の協力で続いています。起点を大切に守っていることに感心します）

然し、老司祭は快受はしませんでした。フランシスコは熱心に説得したので渋々受諾をしましたが内心は迷惑感を抱いていた。老司祭はフランシスコの過去の行状を知っており、成り上がりの商人の息子の道楽であるとしか考えられなかった。

サン・ダミアノ聖堂の修復再建をするには更に多くの大金が必要であることを知ったフランシスコは父がプロバンスに商用に出かけている間隙をついて家から多くの織物を持ち出し自分の馬に乗せ17km離れているフォリニョに出かけ自分の馬も売り徒歩で戻り大金をサン・ダミアノの老司祭に聖堂の修復に使って欲しいと言って聖堂の窓から大金を放り込んだが、この二度目の寄付を老司祭は拒絶し、フランシスコの父からの返還請求があることを予想して手を付けずに保管していた。

それでは聖堂の修復は始まらないことを知ったフランシスコは自らの手で修復を始めた。司祭もフランシスコの熱意と本気さに動かされ、寝床場所として司祭の所から数百m程のところにある小さな家をあてがった。この家の中には盗賊や敵兵隊による侵略から身を守るための洞窟があった。フランシスコはこの洞窟にこもり「祈り、瞑想、断食」をしていました。

商用から戻った父は息子の行動に激怒して息子を探しにサン・ダミアノに行くも見つからず、老司祭は保管していた大金をその父に返しこの一件は落ち着いたかにみえた。

フランシスコの瞑想は「人類の罪のために十字架につけられたキリストの生活」を思い、涙し、いたくため息をつきながらの祈りであった。過去の行動のむなしさを嘆き、罪を悔い改めるために聖書に導かれ、パウロに似たところがあるように彼もパウロの書簡を精読した。

フランチェスコ大聖堂、サンタ・キアラ聖堂、サン・ダミアノ聖堂、リヴォルトの位置関係を地図で示します。



サンタ・キアラ聖堂とサン・ダミアノ聖堂の間は徒歩約20分、ポルチウインクラはサンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂内にあります。サンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂はアッシジの新市街に位置します。

## 父を離れ主に仕える

1207年（25歳）

4月のある日、アッシジの子ども達がひとりの狂人<sup>きちがい</sup>を追いかけているのを父が聞きつけ見に行くとそれはやつれたみすぼらしい息子であった。恥ずかしい服装、髪をもじゃもじゃにし、目はやつれて落ち込み、子ども達のいじめで傷つき、投げつけられた泥でよごれていた。父は悲しさと恥ずかしさと怒りのあまり、息がつまりそうになった。野獣のようになって人の群れに飛び込み、だれこれかまわず殴り蹴り散らし、息子を捕まえて家に連れもどし暗い地下室に監禁した。

数日後父はいつものように旅に出ると母のピカは彼を解放しフランシスコはサン・ダミアーノの避難所に戻ることができた。

戻った父が再び激怒し、今度は裁判に訴えました

「もう自分の子どもではない（廃嫡＝相続権の剥奪）儲かったお金を返せ」と市の裁判所に告訴した。フランシスコはこの争いには信仰が絡んでいると抗告（不服をいうこと）したので、裁判は司教のもとで行われることになった。フランシスコの本気な求道心を認めていたガイド司教は神に仕えるつもりなら父にお金を返すように忠告しました。アッシジの人々は富豪の商人となった父と気狂いになった息子との面白い裁判を見物しようとして広場に集まって来ました。

最初に声を発したのは父親でも司教でもなくフランシスコで、目を輝かせて立ち上がり言った。

「司教様、父のものである金ばかりでなく、この服も返します」

そして法廷の後ろの部屋に入り全裸になり毛の苦行衣だけを腰にまとい他の衣類を全部抱えて出てき、全会集に向かって言った

(ブラザー・サン・シスター・ムーンでは会衆の前で全裸になっている)

「皆さん、申し上げることをお聞きください。今までわたしはピントロ・ディ・ベルナルドーネを父と呼んでいましたが、今、彼にその金と彼から貰った衣服を全部返しますから、もう今からは父ピエトロ・ディ・ベルナルドーネとは言わずに、天にまします我らの父というでしょう！」

フランシスコは自分をハンセン病患者のもとへと駆り立てたのと同じ力と勇気をもって父から離れていきました。

この光景はジョット絵の中でも最も有名なもので、緋色の織物と上等な麻の衣類を父の足元に置き、その上にお金を積んで返しています。居合わせた人々はいたく感動し、多くの人々はワァーと泣きだし、司祭も目に涙を浮かべた。父親だけが感動しなかった。冷ややかな顔つきで彼はかがんで衣類と金を取り怒って真っ青になってむっつりとして立ち去った。すると司教はフランシスコに歩み寄ってヒダの多いマントを拡げて彼を包み抱きしめた。（ガイド司教はその後もフランシスコの面倒を見る）

フランシスコはその時から、予てからの念願が叶って、神の僕になりました。こうしてピエトロ・ディ・ベルナルドネの息子が全てを捨て十字架を担いイエスに従うという福音書の言葉を文字通り実施した。騒ぎがおさまった後、司教は庭師の古いマントをフランシスコに手渡した。彼は喜んでもらい受け近くにあった石灰でマントの背に十字架を書き着服してグッピオにいる友人を訪ねるべく日没迫る頃に出発しました。

途中、森の中で「お前は、誰だ」と追いはぎに襲われるとフランシスコは平然として「大王様の使者です。あなた方と何の関わりがありますか？」と応えた。追剥ぎ達は背の十字架を見て哀れなこの男からは何も取れるものはないと判断したらしく「百姓め、そこに寝ている。使者などとぬかしおって」と叫んで手足をひつつかんで残雪の残る谷間に彼を投げ落とした。フランシスコはやっとの思いで雪深い谷からはい上がり前のように神の賛歌を歌いながら更に山を越えて歩いた。その日は小さな修道院に泊めてもらい数日後グッピオの友人をた訪ねた  
そして、粗末な長衣に革帯をしめ靴を履き、手には長い杖を持つ隠修士の姿となった。

その後しばらくハンセン病院に住み、その患者の足を洗い、膿を出したり、傷に包帯をし、時には接吻をさえしたと言われています。

そして、サン・ダミアノ聖堂の修復を始める時を考えていたのです。

10月のある日、フランシスコは時が満ちてサン・ダミアノ聖堂に現れました。フランシスコの出現に面食らったのがサン・ダミアノ聖堂の老祭司で迷惑千万という顔相であったようです。ともかく、フランシスコは修復にとりかかった。然し、資材を買うお金はなかった。彼が資材を買う為にとった行動は隠修士の姿のまま旅芸人ようになって、昔、覚えた「吟遊詩人」の真似をして人々に歌を聞かせ、終わると「石を一つ下さるお方は天国で報いを一つ受けます」と言い回った。始めは噂の男が戻って来て気狂いが興じて大袈裟なことを言い始めたと言ったが、その真剣さが本気であったのでアッシジの人々も見方を変え始め、彼は一山の石を集める為に近くの司祭ジルベストロから安く手に入れることに成功し、それを担いで運んで、歌を歌いながら自分でレンガや石を積み上げていきました。立ち止まって見る人には「こちらに来て、ダミアノ聖堂を建て直すのを手伝ってください」と呼びかけた。熱心に犠牲を捧げる姿を見てサン・ダミアノ聖堂の老祭司は感心して夕食の用意をして感謝の意を表した。司祭ジルベストロが安い価格で材料を提供したように町の人々の善意によって修復は順調に進みました。ある日のこと彼は老祭司の親切を受けることは自分が求める使徒のような清貧にはならないと感じ、翌日は、アッシジの昼の鐘が鳴り人々が食卓につくとフランシスコはさっそく

鉢を持って街の家々を 周り始めた。一軒一軒回ってみると何か恵んでくれる家が多かった。2〜3杯のスープ、いくらかの肉のついた骨、一切れのパン、2〜3枚のサラダ葉っぱその他色々。物乞いが終わると鉢は一杯だったが、それこそ食べられそうにもないごたまぜの料理だった。犬の餌さながの鉢を覗き込み、吐きそうになるのをこらえて最初の一口を飲んだ。するとハンセン病患者に接吻した時のような気持ちになった。彼の心は甘美な聖霊に満たされ、こんな美味しい御馳走を食べたことがないように思われた。彼は小躍りして戻り老司祭にこれからは自分で食事をします(祭司の夕食を断った)フランシスコの清貧の道が 又一段と進められた瞬間でした。レンガ積み技術は若い時の城壁作りに参加した時に習得しており、乞食はローマで体験済みでした。

サン・ダミアノ聖堂の仕事ははかどった。修繕ではあったが落成祝いとして聖堂の主祭壇の常明燈の油をたっぷりと得たいと思ったフランシスコは、アッシジの街を巡り歩いたが、ままならず、旧友の家に行った。その時宴会がたけなわだった。すると勇気を失った。ハンセン死病患者に口づけをし、父に反抗し、森の追いはぎを恐れなかった彼が、旧友達の前に出るのをためらった。彼はその家を二三歩行き過ぎたが臆病を恥じてとって返し、友人たちの前で自分の弱さを告白し油を神の愛ゆえに恵んでくれるように願い喜び溢れる寄付を受けることが出来ました。またしても自分の弱さを乗り越え使徒的生き方への道を確認なものにしていきます。

## 宣教活動の始まり、弟子が与えられる

1208年 (26歳)

1207年から1208年の冬の間、サン・ダミアノ聖堂ばかりでなく、ハンセン病患者がいる地域の二つの聖堂、サン・ピエトロ聖堂の修復とポルチウクラ聖堂の修復に精を出し多くの協賛者と支援者を得て狂人から聖者への歩を始めました。

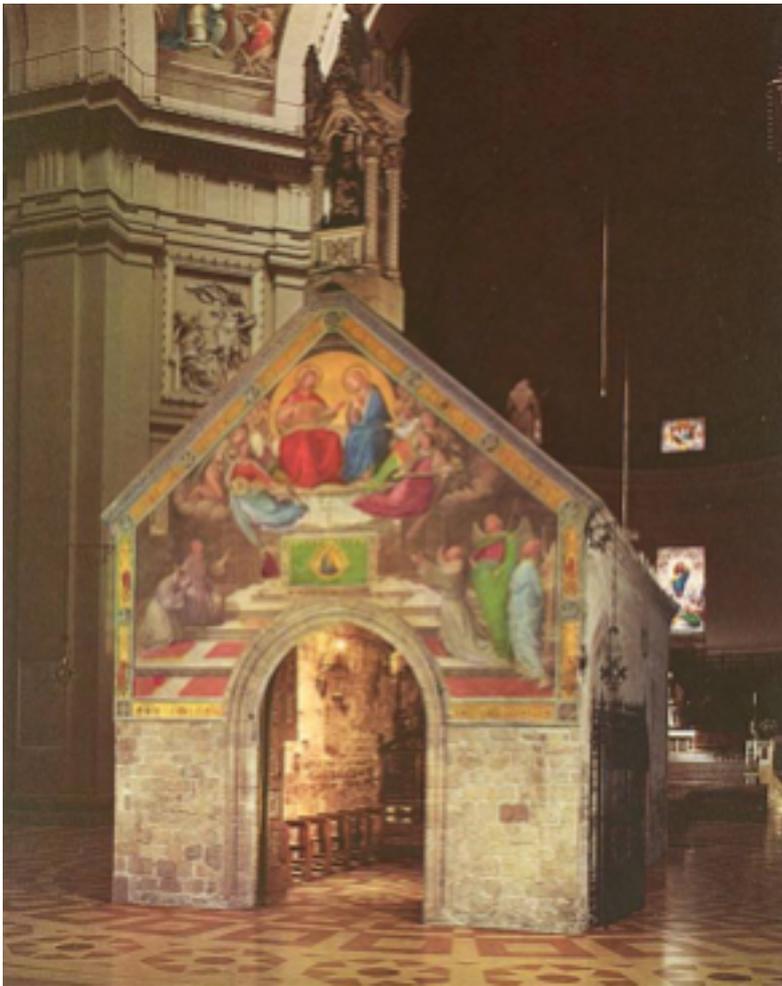
### (1)ポルチウクラ聖堂での啓示

1208年2月24日、自ら修復したポルチウクラ聖堂の早朝ミサに参列しました。そのときに新しい命令を主から聞きます。それは司祭が朗読したマタイによる福音書10章7-13節のみ言葉でした。

「行って『天の国は近づいた』と<sup>の</sup>宣べ伝えなさい。

病人をいやし、死者を生き返らせ、らい病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。だだで受けたのだから、だだで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。

旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。



ポルチウインクラ小聖堂は現在サンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂の中にあります。

うにと言う挨拶をお示しになった」と記されています。彼はそれを受けて「これがわたしのしたいことです。できるだけ、そのとおりに生きていきたいのです」と興奮して叫んだ。

かくして、使徒にならって生きること、余計な物は持たず、この世の心配を捨て、心で歓喜をあげながら「悔い改めよ。天国は近づいた」、「主の平和が与えられるように」と呼ばれる使命を心底から自覚した日となった。悔い改めと平和の福音の告げる者となったのです。

その日、聖堂を出るや、彼は靴をぬぎ、杖を捨て、寒さを凌ぐマントを脱いだ。帯の代わりに縄を腰に巻き（結び目は三つという説もある）その地方の百姓の着るような頭巾のついた長い褐色がかかった灰色の上っ張りを着、はだしで使

町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる」（新共同訳より引用）このみ言葉がフランシスコにとっては神の啓示となります。

回顧録によると「いと高い者ご自身がわたしに、わたしが福音に従って生きるべきことをお示しになった。主はわたしに**主の平和を与えられるよ**



「聖フランチェスコ」（画：フランシスコ・デ・スルバラン、1658年）

徒のように世に出て行った。

その日から、又々異様な光景がアッシジの町に見られるようになった。町のここかしこの広場や通りにその姿が現れ「主の平和が与えられるように」と挨拶し大勢の人が集まるとはだして階段か石の上に乗って説教をはじめたのです。

それまでのフランシスコは自分の救いを求めて道を求めていましたが、これからは平和の使者として、世界の人々に救いの意味と価値を宣べ伝える使命が課せられたのです。それは一人で出来ることではなく心一つにする同士が必要になりました。兄弟たちと一緒に新しい十字軍を起こす決心を立てたのです。

## (2)最初の弟子二人

ベルナルドとカッターニー

フランシスコはハンセン病病院での奉仕を毎日行いながらあちこちを遍歴し説教をしていました。彼の行動を長く静かに観察していた青年がいました。

彼は富裕で思慮深く、ボローニャ大学で法律を学んだ博士で模範的なアッシジの市民でした。フランシスコの行動を「つかの間の戯れ」と思って観察をしていましたが、その本気さがベルナルド自身の持っていた「聖性へのあこがれ」に火がつき弟子入りを願うのです。

(最初の弟子にはそれぞれに有名な解説がありますがここでは割愛します)

その二日後にサン・ルフィーノ大聖堂の参事会員で法律顧問をしていたピエトロ・ディ・カッターニーが弟子入りを願ってきました。

この二人が「弟子になるにはどうしたらいいか？」と尋ねると

「イエス・キリストに相談し、み旨を示してくださるように、教会へ行って、主が弟子達にせよと命じられたことを福音書で読むことにしましょう」とフランシスコが言い三人は連れだってサン・ニコロ教会へ行き祈り、フランシスコが祭壇に上がって聖書を開いた。最初の箇所は「もし完全になりたいなら、行ってあなたの持ち物をすべて売り貧しい人にやりなさい。そうすれば天の宝をうけるでしょう」(マタイ19<sup>21</sup>、マルコ10<sup>21</sup>、ルカ18<sup>22</sup>)というみ言葉を見つけました。

もう一回開いたら「わたしに従いたいと望む人は、自分を捨て、自分の十字架をになって、わたしに従いなさい」(マタイ16<sup>24</sup>、マルコ8<sup>34</sup>、ルカ9<sup>23</sup> 14<sup>27</sup>)

更にもう一回開いたら「旅のためになにもたずさえてはならない」

(マタイ10<sup>10</sup>、マルコ6<sup>8</sup>、ルカ9<sup>3</sup>)というみ言葉が見つかりました。

(この三度開いて決めるというのは当時の習慣でもあった「使徒の託宣」という儀式名がついています)

そこで、フランシスコは聖書を閉じて二人に言った

「兄弟たちよ、これがわたし達の生活規則であるばかりでなく、わたし達と一緒に生活したい人々の生活の規則であります。だから、さあ行ってお聞きになったことをしてください」(会則の種が播かれる)

こうして二人は別々の場所で全財産を貧者に施し始めました。

### 司祭ジルヴェストロ

ベルナルドの財産処分にはフランシスコが同道していた。そこへ司祭ジルヴェストロが現れた。(彼はフランシスコがサン・ダミアノ聖堂の修復の時に多くの石を安い価格で売ってくれた人です)彼はフランシスコに「あの時、わたしから買った石はずいぶん安かったね」(本音、もっと金が欲しいのだが)と。フランシスコはベルナルドの懐からお金をむんずと掴みそれを数えることなく司祭に手渡して言った「司祭様これでご満足ですか」司祭は礼を言って立ち去った。この時からジルヴェストロは自分の貪りの罪に悩み始める。後に1210年、回心して弟子となる時が来る。三番目の弟子ではありませんがここで登場するユニークな人物です。

ベルナルドとカッターニーはすべてをきちんと片付けてフランシスコと3人でポルチウクラで夜を過ごしました。ここが今後の活動の中心となる所です。

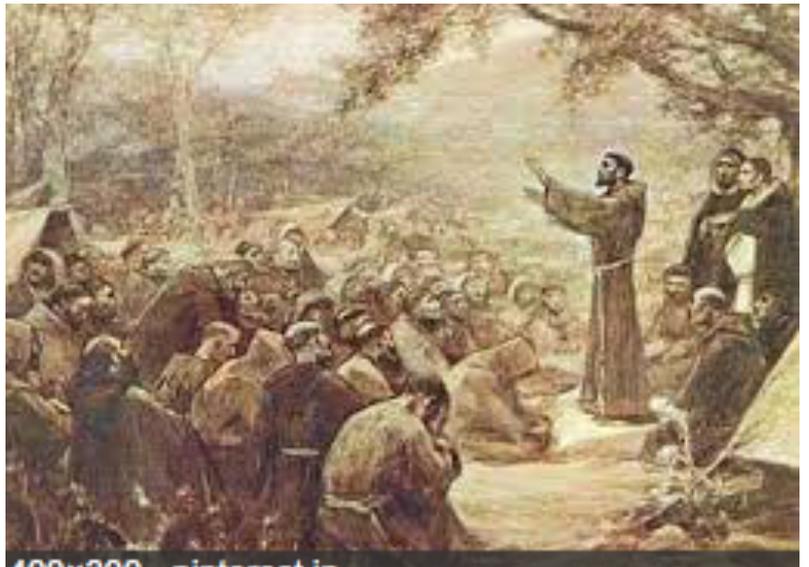
### (3)エンディオが弟子となる。

ベルナルドとカッターニーが弟子入りしたことはアッシジの市中で大評判となり、昼は市場で、夜は炉辺ろばたの団欒でつきない噂の種となった。家族からこの話を聞いたエンディオは4月23日朝早く起きてサン・ジョルジュ教会のミサに出て、そこから真っ直ぐにポルチウクラに行き弟子入りをした。ベルナルドの弟子入りの一週間後であった。エンディオの前歴は吟遊詩人であったようでフランシスコは自分たちを「円卓の騎士」と名づけて喜んだようです。(武田友寿著p237)

### (4)3人の弟子と共に宣教活動を始め

昔の使徒にならって二人一組になって宣教活動に入りフランシスコはエンディオと組み、アドリア海のアンコーナ(アッシジから132km)、リエティの谷(アッシジから121km)にも出かけた。その帰りに3人の弟子を伴ってきた。サッパティーノ、モリコ、帽子かぶりのジョバンニ(彼は間もなく脱落する)

フランシスコは6人の弟子に布教に出る前にポルチウクラの森の中で「忍耐について」力をこめて語りました。予想される事態に備えるために次のような趣旨でた。



「わたしの愛する者たちよ。行って平和と改心の福音を述べ伝えなさい。苦しくともがまんしなさい。どんな質問にもへりくだって答えなさい。迫害する者を祝福しなさい。不正を加え悪口を

言う人に感謝しなさい。なぜならこれらすべてのために天国で大きな報いをえるだろうから。学問がないからといって、なにも恐れるな。なぜなら、あなたがたが自分の考えで話すのではなく天の御父の霊があなたがたを通して話すのだから（マタイ10⑳）信心深く、善良で、平和を好む人はたくさん見つかるだろう。又キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるためにあなたがたは招かれて一つの体にされてのです。いつも感謝していなさい。キリストのことばがあなたがたの内に豊に宿るようにしなさい。智慧を尽くし互いに教え諭し合い、詩編と讃歌と霊的な歌により感謝して心から神をほめたたえなさい」（コロサイ人への手紙3⑮-⑰）

#### (5) フランシスコが弟子に教えた讃歌

祈りの詩人でもあるフランシスコは多くの讃歌を作っていたと言われています。初期の讃歌がヨルゲンセン著に記載があります。

神を畏れ敬え。神を誉め讃えよ。

全能の主に感謝し、礼拝せよ。

万物の創造主、父と子と聖霊の三位一体の神を。

改心せよ、改心のふさわしい実を結べ

すぐ死ぬ身であるのを、わきまえるべきなのだから。

求めよ、さらば与えられよう。許せ、さらば赦されよう。

人の罪を許さなければ、主はおまえたちの罪を赦されないだろう。

すべての罪を告白せよ。

悔い改めて死ぬ者は幸いである、天国に入るだろうから。

悔い改めず死ぬ者は災いである、

悪魔の子となり、その業をなし、永遠の火に入るだろうから。

用心して、あらゆる悪を避け、終わりまで善を固持せよ。

## (6)弟子達の忍耐と伝道活動

フランシスコが旅のはなむけとした忍耐の勧めを、兄弟たちはすぐ必要とした。多くの人は彼らを気違いと思って、ののしり、泥や石をなげつけた。服をうばう人々もあったが、兄弟たちは福音的人間として抵抗せず、半ば裸で歩き続けた。ある人々は兄弟たちの頭巾をつかんで、粉袋のように仰向けに引きずり回した。フィレンツェでは寝るために軒先を貸して欲しいと頼んでも断られた。

然し布教の旅から戻るときには4人の兄弟を連れていた。

フィリッポ、(サン・コンスタンツォの) ジョバンニ、バルバロ、(ヴィギランツィオの) ベルナルドである。リエティの谷にから戻ってきたフランシスコはアンジェロ・タンクレディという騎士を連れ帰ってきました。

## (7)リヴォ・トルトに移る

1208年、夏頃には仲間は11～12人に増えていた。数が増えたのでポルチウクラの小屋では住めなくなり20分程の距離にある小川の曲がりくねった所に移住した。リヴォ・トルトの納屋といわれる狭い小屋であった。ここはハンセン病病院が近かったことと毎日の生活に必要な水の恵みに預かれる場所であった。ハンセン病患者の世話は弟子達にとっては入門の条件となっていました。

弟子の数が増えたための問題は毎日の托鉢の生活に支障が生じたことである。弟子達が一碗の食べ物も貰えず戻ってこともある。街に出れば子ども達に石を投げつけられた。托鉢に回る弟子達が多くなるとアッシジの市民達は煩わしく迷惑がった。そればかりでなく市民はこのグループに警戒の目を向け始めガイド司教に訴えた迷惑行為として訴えた一般市民もいました。又、異端運動として捉えた学者や聖職者からの訴えもありました。

明日を思い煩わない自由さも他から見ると危険にみえたわけです。フランシスコを温かく見まもってきたガイド司教が見かねてフランシスコを部屋に呼び助言しました。

## (8)フランシスコの苦悩

フランシスコの苦悩は弟子が増えるにつれ深刻さが増していきました。

行動派であったフランシスコは洞窟でひとり祈る隠修士でもあった。リヴォ・トルトの上流に洞窟(カルチェリーといっていた)を見つけ彼は自問し祈っていました自分はリーダーになっている。弟子をまとめ、教え導き、指揮監督をしなければならなかった。そしてイタリアの各地の街頭に足を運び、人々に福音を伝え、平和の

メッセージの実践者として人々に尊いその意味と価値を宣べ伝えて歩かなければならなかった。あのポルチウクラの啓示を受けるまで考えてみたこともなかった。放蕩の生活から抜け出すこと、無為の日々から這い上がること。フランシスコが望んだことは、自分ひとりが罪から救われることであつた。その可能性がみえてきた時に、彼は師と仰がれ、慕われ、指導する立場となつていた。「個から衆へ」個人の救いだけでなく衆人の救いへと使命が広がつていた。それは彼ひとりで出来ることでもなかった。その戸惑いの心境とヨルゲンセン著は次のように記している。

「わずか数年前は道楽者の中の道楽者、罪人の中の罪人だつたのに、あえて人の道案内者、弟子達の師となるとは、いったい何ものなのだ。あえて他人に説教し、戒め、導くとは、イエス・キリストの名をけがれた口にするのにも値しないのに、いったい何ものなのだ。過去と未来の自分の姿を考えるなら、いま心の奥底では神の助けをまだ得ていないのだから、これから神が自分を助けてくれないとしたら———そんなことを考え、また自分を愛してついてくる人々が、自分をどう思っているかを考えてみると、ぞつとして、恥ずかしく穴があつたら入りたいくらい」謙虚な祈りの姿勢、妥協にない悔い改めと神との平和を渴望していました。

## 「小さき兄弟たち」の生活様式「会則」を定める

1209年（27歳）

### (1)ガイド司教との対談、

フランシスコはガイド司教を「魂の父」と呼んでいます。実父との裁判に立ち会つて裸のフランシスコにマントを掛けたときからガイドは温かく彼を見まもっていました。

「あなたの理想は高すぎる。宗教指導者として行き過ぎだと思う。兄弟達に、少なくとも日常生活に事欠かない位の所有は認めるべきだ」とガイド司教の助言しましたがフランシスコの決心は変わりません。

「司教様、財産があつたら、それを守る武器も必要でしょう。財産のために、隣近所の人との争いが起こり、神と人への愛が傷つけられます。この愛をそっくり保つために、この世でなにも所有しないと、かたく決心しているのです。フランシスコが望んだのはナザレのイエスの望んだことだつた。人間はできるだけ所有しないこと、生計のために自分の手で働くべきで、働いても駄目な時は援助を求むべきこと（托鉢）いらぬ心配をし、余計な財産をためないこと、小鳥のように自由に振る舞い、世俗の罨にはまるべきでないこと、神にお恵みを感謝し、その業の素晴らしさを讃えて生きるべきことである」（ヨルゲンセン著p90）

ガイド司教はフランシスコの考えの中に異端性を認めることができず、むしろ自分を超えているフランシスコを祝福して対談は終わった。

## (2)リヴォ・トルトで会則の創案 最初の総集会12人の兄弟が集まる

ともかく集団ができると手続き上、先ず必要になるのが入会の条件です。その為に集団の理念が明らかにされなければならない。集団の存在理由にかかわることである。弟子が増え必要に迫られて「会則」が必要になると同時に異端が増えていく中で説教権をローマ法皇から承認してもらうために「会則」が必要になりました。最初の会則はフランシスコが自ら行動してきたことを文章化することから始まりました。

①マタイによる福音書10章⑨⑩「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である」

②マタイによる福音書19章⑳「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それからわたしにしたがいなさい」

③マタイによる福音書16章㉔「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」

④ルカによる福音書9章③「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持って行ってはならない」

フランシスコが「簡単なことば」で書いた会則案は「使徒的生活法＝使徒に見倣った生活様式」でした。

「働く者が食べ物を受けるのは当然である」ように彼は日常生活をするためには働くことを命じ、働いた報酬は金銭以外は素直に受けました。仕事がないならば托鉢して食べ物をうることを実践し且つ勧めたのです。

無所有清貧の精神が基調となって自分の食べ物は労働か托鉢で自分で工面する。

それが「自分の十字架を負って、わたしに従いなさい」との主の言葉を素直に受け入れることを決心していたのです。

組織にはそれを作った人間の意図を離れて動く自己運動があり「会則」はその後時代の変化によってフランシスコの思いと関係なく複雑に改定されていきます。然し幸いにして智慧ある弟子に恵まれ最終的にはフランシスコの理念を継承する組織に成長し今日まで存続しています。ここでカリスマとしてのフランシスコの意見にのみ引っ張られていたら継承はなかったとわたしは考えます

ともかく、1209年の最初の創案は簡単であった。これをもってフランシスコはローマ法皇に謁見<sup>えっけん</sup>を求めることとなります。

## 原始会則口頭承認

1210年（28歳）

(1)「個から衆へ」の道の確立を求めてローマへ

ポルチウクラの啓示を受けてから「個の救済」から「衆の救済」という使命に目覚めたフランシスコは大衆に説教をしなければならぬ。当時は異端の続出という時代で「説教をする資格」を得なければ異端視される恐れがありました。

（1200年頃の反教皇的、反教會的な動きは宗教改革の16世紀や18世紀の革命の時代よりも強かったとヨルゲンセン著は記しています）

当時の教皇は政治的にも力を発揮したイノセント3世したので反抗する勢力も強固でした。中でも恐れられていたのがプロバンス地方から出てきたアルビ派集団でした。プロバンスはフランシスコの母の故郷でした。

増えていく弟子達の使命を守り果たせるように、「自分たちの伝道内容、使徒にならった生活様式がイエスの教えに従順であること」をローマ法皇に容認してもらうためにローマに向かいます。これにはガイド司教の勧めがあったかも知れません。

1210年の春のある日、ガイド司教がローマに滞在している日をねらってベルナルドと数名の弟子を伴ってローマに向かいます。

ガイド司教は枢機卿ジョバンニと知己であったので、一行はこの枢機卿の家に泊めてもらうことになりました。このことはフランシスコ達には幸いし、その生活態度を見てもらうことによって異端や邪教でないことを容易に枢機卿に認められました。

数日経つと枢機卿はイノセント教皇を訪ね「非常に完全な男を発見しました。彼は福音書のことばによって生き、なににつけ福音の完全さを顧慮しています。主のみ旨は、彼によって全世界の教会の信仰を新たにすることにあると思われま

す」と報告しました。イノセント3世教皇の謁見は叶いました。第一回目は身なりが汚らわしいので豚扱ひされ、早々に退席させられます。フランシスコは食い下がり第二回目の謁見に持ち込み、教皇は考えを聞くことになりました。そして興味を示し、認可を枢機卿会にかけることになり、第三回目の謁見を待つことになりました。

フランシスコの考えと希望は枢機卿会の中で大反対を招きましたが、ジョバンニ枢機卿の鶴の一声であらゆる反対を鎮めることができました。

「この男の希望は、福音に従って生きることを認めてもらうことだけです。それは人の力ではできないことだ、とわたしたちが宣言するなら、福音に従うことを不可能と宣言し、福音書のおおもとであられるキリストを、あざけることになろう」

この言葉が教皇に感銘を与えフランシスコは再びラテラノ宮殿に召喚されることになり、第三度目の謁見となりました。（教皇の夢は有名な話は割愛）

招かれたフランシスコは教皇に感謝するとともに用意していた説教のような話を教皇にしました。かなり長い話ですがそれを聞いた教皇は側に立っていた枢機卿たちの方を向いて

「たしかにこれは、**神の教会を再建すべき**、聖く敬虔な男だ！」  
と大声で言って、立ち上がり、フランシスコを抱き、彼と兄弟たちを祝福して言った。

「兄弟たちよ。神と共に行き、主があなたがたにお示しになったように、すべての人に改心を宣べ伝えなさい。全能の神があなたがたの数をふやされたら、安心して戻ってきなさい。わたしは喜んであなたがたにもっとたくさんのことを認め、もっと多くの任務をゆだねましょう」

兄弟たちはみな教皇の前にひざまずき、服従を誓った。その後で教皇の命によって、11人の兄弟は上長としてのフランシスコに服従を誓った。説教の許可も同じように与えられ、又彼を通じて、他の兄弟にも与えられた。謁見の終わりに、兄弟たちはついに剃髪ていはつをうけた。それは神のことばを宣べ伝える許可を外的に示す徴しるしであった。4月26日のことでした。

(口頭承認と言われている。会則ではなく使徒的生活様式が認められた)  
教皇のことばに教会の改革の必要性がにじみ出ている点に注目です。教会自体の改革の必要性は内部でも認識されたいことが分かりますが、フランシスコはカトリック教会の改革者であると言われ、今日まで大きな影響力を持っています。

「小さき兄弟たち」正確には「より小さき兄弟たち」の会は「原始会則」に基づき1210年イノセント3世の口頭承認によって認められました。会員は12名でした  
「より小さい」とは人数が少ないからではなく「謙虚に生きる」という意味  
「兄弟たち」と言う表現は「神の前においてはすべて兄弟であるというイエス・キリストの教えからきています。

「あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ」(マタイによる福音書23章⑧)フランシスコは弟子を兄弟と呼んでいる。司祭が弟子になったときフランシスコは聖餐を弟子の司祭から受けている。フランシスコには制度上の聖職者の資格はなかったので、彼はこれを素直に認め通例の規則に従っています。「小さきもの」のを率先しているのです。

本稿では兄弟を弟子と表記しています。

## (2)司祭ジルヴェストロ等が弟子入り

この後間もなく前述の司祭ジルヴェストロが弟子入りしています。

彼は悶々と悩み罪を悔い改めフランシスコの門を叩いた。当時すでに出来上がっていた会則によって、全ての財産を処分し貧しい人に施しをこなさなければならなかった。彼はそれを実行した。小屋には彼を受け入れる空間がなかったので彼は小屋の側にひとり用の小屋を作って住んでいた。司祭という教会の公式メンバーが平信徒の集団に自ら進んで入ったことになる画期的な弟子入りです。又彼は組織の運営の持つ厄介な問題解決にも貢献できる立場と知識を持っていました。フランシスコ会の最初の司祭でした。

この年に弟子になったのは吟遊詩人パチフィコ、アッシジ司祭のレオーネ、クララの親戚であるルフィーノ、後にフランシスコ会の組織を固めたエリア、単純さで知られるマッセオとジネプロがいる。エリアこそカリスマとしてのフランシスコを組織としてのフランシスコ会に導いた弟子です。使徒の時代で言えばパウロに相当すると思われま

### (3)初めての総集会

1210年9月初めての総集会がポルチウンクラで開かれた。イタリア中部に出かけていたすべての兄弟が戻ってきて、相互の兄弟愛を固め、体験を語り合い、新しい規則を作りフランシスコの考えを純粹に守る道を開いていきました。

この総会で「世俗を出たいと思う」女性のために（第二会）が、又、男女の区別なく家庭の中で（世俗内）福音を生きたいと望むすべての人のために第三会が誕生しました。（教皇による承認は後年になります）

### (4)フランシスコの説教の影響

1210年9月9日アッシジの大憲章

フランシスコの調停により上層階級と下層階級の和解ができました。

13世紀のイタリアは封建制度が確立し、身分の上下関係の厳しい時代であった。

その上に神聖ローマ帝国と教皇との領土争いがかさなり、社会の混乱は凄まじく内乱が続発していた。

社会は大別して、王侯、貴族、騎士、高位聖職者からなる上層階級（マヨールス）と下級聖職者、農民、商人などが属する下層階級（ミノールス）分かれていた。市政における格差をめぐっての対立は多くの都市にあったがアッシジではフランシスコの平和の調停により両者に和解が成立した。

この影響はアレツォ、ペルージャ、シエナに及んだといひます。

フランシスコはミノールス（小さな者）に属していたこと、信仰的にはイエス・キリストの最大の謙遜、神ご自身が、神としての姿を捨てて、貧しい人間となられた受肉の謙遜にならって「アッシジの改心者」のグループ名を「小さい兄弟の修道会」

と名づけ既存の修道会とは異なる生活様式を宣言し、弟子を兄弟と呼んで神の前にすべての人は平等であるとの考えを明らかにしました。

「教皇の権威によって公明正大に」宣教活動が出来るようになったが、フランシスコの生活や説教には変わりはない。ガイド司教の顧慮によってアッシジの司教座聖堂であるサン・ルフィーノ聖堂での説教を任されたことによって大衆にその教えが広まった。アッシジの遠くに及んだ「この地方の全貌が変わった。恵みと実りをもたらす河のように、フランシスコはこの地方を流れ、心の畑を潤し、徳の花を開かせた」（ヨルゲンセン著p112）

## 「祝されたフランシスコの小さな苗木」クララが現れる

1211年（29歳）

### (1)リヴォ・トルトからポルチウンクラに戻る

1211年のある日のこと兄弟たちが小屋にいて、それぞれ静かに祈っていたとき、不意に百姓がろばをひいてきたが、ろばにむかって「入れ、ろばめ、ここは居心地がいいぞ」と叫んだ。百姓はこの地主であった。こうして1208年から住んでいたリヴォ・トルトを去ることになったが、ちょうどベネディクト会からポルチウンクラ聖堂を委ねられ、その側に、木の枝や葉や泥で小屋を造って住むことになった。寝床はわら袋、地べたが机と椅子、囲が修道院の壁という粗末なもので、これがフランシスコ会の最初の住まいとなった。このころには弟子の数も増え、ルフィーノ、マッセオ、レオーネらが加わっている。ルフィーノはクララの親戚、荒野の隠者になった孤独な禁欲な姿勢が強く祈りと観想にふけるタイプ、最初の弟子ベルナルドに似ている。マッセオはフランシスコの旅の常任従者で「美丈夫で、口達者で話術に長けていた」

レオーネ、フランシスコの聴罪司祭と秘書を兼ねた最も信頼した弟子でフランシスコは彼を「兄弟神の小羊」と呼んだ。この三人とアンジェロが現在の聖フランシスコの墓の天蓋に描かれている。

更に冬から翌年の春にかけてジルベストロを伴ってトスカナに向かい途中ペルージャでは「平和の仲立ち」をしアレッツォに行った。

この間、後に重責を負う弟子を連れてきた。一人はエリア・ボンバローネ（大聖堂や学校を建てる）、そして、後に総長となるアルベルト、更にジョバンニ・バレンティ（ボローニャ大学出の優れた法学者）である（ヨルゲンセン著から引用）

### (2)クララ、フランシスコの説教を聴く

口頭承認を得た後ガイド司教からサン・ジョルジュ聖堂で説教をする機会が与えられていました。

裕福なクララの家は町の中心地にあり、その早い時期からフランシスコの説教を聞くことができました。1211年春（四旬節）クララはサン・ジョルジュ聖堂に向かいます

クララ（イタリア語で、キアーラ 耀く女の意味）

まことに<sup>まぶ</sup>眩しく才色兼備、耀くように美しい娘で幼いときから、並みはずれて信心深かった。クララは生涯を俗世と隔絶した修道院で過ごしたことから厚い神秘的ベールで覆われている。

彼女は好んで自分をフランシスコの植えた草花（小さき苗木）と呼んでいる。

### クララの生い立ち

1194年7月11日生まれ、アッシジきっての名家貴族ファバローネ・オフレドゥッチオ家に生まれ、市の中央のサン・ルフィーノ広場に面した宮殿のような住居で育てられました。

父の名はファバローネ・オフレドゥッチオ、母はオルトラーナ、財産といい部下の数といい、小王国のようでアッシジ第一の名門貴族出身で、誕生は祝福され、賢さは称賛されました。

1198年アッシジの内乱（貴族と市民の抗争）を逃れて貴族であるクララ（4歳）は家族一同でペルージャに移住してアッシジに戻ったのは1205年（9歳）の冬でした。

クララは戦乱の中で育ちました。同じ住民同士が戦って血を流し、命を落とす。恐ろしい光景を見て育ったのです。清貧への改心の転身は彼女の天性の資質と篤信な母の姿から影響を受けています。

オルトラーナ夫人も才女の誉れ高く、又、信仰も深い人でした。女の旅の難しい当時あって各地の聖地巡礼やローマ巡礼をおこなっています。母の信仰によってクララの無垢・清純な乙女ごころに聖者讃仰に火を点じられたのです。

15歳、1208年最初の求婚者が現れた。貴族の令息であった。父は賛成した。

クララはキッパリと断った。この時期クララはフランシスコとの出会いはないが1210年法王庁から口頭認可を受けたフランシスコが積極的に宣教を始め、アッシジの聖堂で説教していることは知らされていた。

放蕩息子から宣教者になったフランシスコの噂は町中で知らないほどに有名になっていた。クララの父方の従兄弟であるルフィーノは既にフランシスコの門を叩いていた。クララの心が揺れ始め、ひそかにフランシスコの生きかたに憧れを抱いた。

1211年春（四旬節）サン・ジョルジュ聖堂で説教を聞いた。クララがフランシスコと直接顔を合わせた始めて、それまでは面識がなかったが、彼女の友人ボナ・グエルフッチオにこの気持ちを打ち明けた。

その後約1年間フランシスコの「悔い改めと平和」の説教を聴き、彼の生活態度を見て「彼の生活こそ自分の生活になるべきで、それこそ神のみ旨であることをはっきりと悟るにいたる。

## クララ、弟子となる

### 1212年（30歳）

(1)1212年春（枝の主日）クララは家を出てフランシスコのもとに身を投じた。ポルチウクラの天使マリア聖堂において入会式行われる。

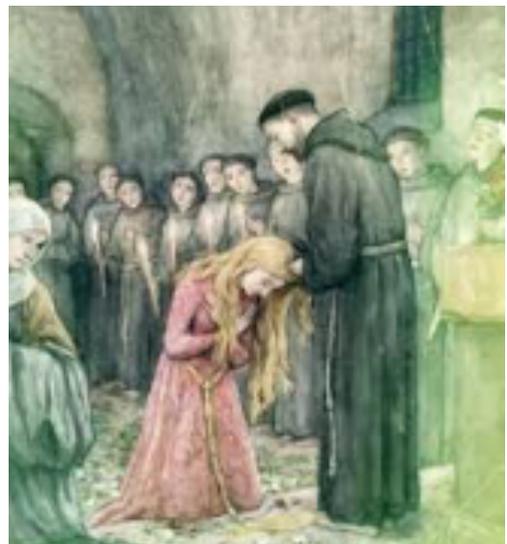
この日の朝、クララは一番の晴れ着を着て、母や妹たちとミサに参列した。聖壇でガイド司祭がオリーブの枝を祝別して、信徒がそれを拝受するために祭壇に向かって列をなした。一人だけ席を動けなかったのがクララであった。クララはその夜、家族との決別を実行する決意をしていた。「長い年月が同郷の者をひそかに結びつけた優しく強い絆が、この厳かな瞬間に彼女の心の中で切れ、胸苦しくしたのだろう」

その日の決行を知っていたガイド司教はクララのうなだれた頭、すすり泣く肩を見て、その心中を察した。彼は優しく枝をクララの席に持って行った。

その夜、クララは逃亡を決行した。予知していた父は女性の手では外出することが難しいほどの薪を門に積んで外出することを阻もうとしていた。クララはその薪を崩して通り抜けボナ・グエルフッチオに付き添われポルチウクラに向かった。待ち受けていたフランシスコ会の人々は松明をかかげて森の中で彼女を迎え、彼女は礼拝堂の聖母の絵の前にひざまずき、既に書いていた告別の手紙をおいた。

彼女は晴れ着を兄弟たちに手渡し、代わりに兄

弟たちのと同じ、粗い毛織りの修道服を受け、宝石で飾られた帯を、結び目のあるあら縄に着替えフランシスコの前に出た。クララはフランシスコの前にひざまずき「清貧」「貞淑」「従順」を誓い「頭を下げて、そのしなやかな髪をフランシスコのハサミの前に差しだした。フランシスコの手は、かすかに震えていた。クララは、それに気づかなかった。祈りに没頭していたのである」



フランシスコのハサミで彼女の見事なブロンドの髪が切り落とされた。彼女は重い黒いヴェールをかむった。刺繍のたくさんついた靴の代わりに木靴を素足にはいた。三つの修道誓願をたて、更に兄弟たちのようにフランシスコに従順する誓いもたてた。入会式がすみ、貴族の令嬢クララは修道女クララとなった。その夜のうちにパスティアのベネディクト修道院サン・パウロに連れて行った。かねて定めておいた住まいだった。その住まいは家族に隠しおおせず父と親戚たちが修道院にやってきて、帰るように説得したが18歳の娘は聞き入れなかった。父と叔父が手荒なまねをしようとするや彼女が聖壇の祭壇にしがみつきの、ヴェールをはねのけて髪を切った頭を見せた。

父や親戚の執拗な追尾を逃れるために逆方向のスバジオ山のサン・タンジェロ・ディ・パンゾ修道院に隠れた。この修道院に移ってから数日後妹のアグネスが飛び込んでくる。アグネスは結婚式が決まっていた

二人の娘の逃亡に父の怒りは心頭に発し、弟に武装した12名の家来を率いてアグネスを連れもどすように命じた。彼女は殴られ蹴られ髪をつかんで修道院から引きずり出された。アグネスは力の限りに反抗し「クララ助けに来て！」と叫んだ。なかば死人のようになったアグネスをクララは修道院に戻した。二人はサン・ダミアノ教会付属の小修道院に移ることができた。サン・ダミアノ修道院はフランシスコが主から修復を命じられた聖堂である

清純な心清、清貧と喜びの生活は多くの女性を惹き付けクララのもとに集まって来た。近くに小さな建物が出来、クララは召されるまでそこに住んだ。1215年クララはフランシスコの厳命によってサン・ダミアノ修道院の院長になったが謙遜に下働きに徹し弟子の足も洗った。「命じるよりは進んで自分で行った」

クララと出会ったフランシスコは四旬節の間、アッシジから離れトラジメ湖の無人島で厳しい自己との格闘と祈りの日々を過ごしていました。

この冬の大部分をフランシスコはキウジ付近の山上サルティアーノの庵ですごした。そこからはアッシジの街がよく見えた。彼はこの孤独のなかで激しく（結婚への）誘惑され絶望しそうになった。（フランシスコ30歳）

迷ったあげく神の判断を仰ぎ、二人の霊的な友へ相談しました。

二人の答えは「あなたが説教に出かけるのが神のみ旨である。なぜなら、神はあなた自身のためばかりでなく、他人の救いのためにも、あなたを召されたのだから」と一致していた。この問答のとき、フランシスコの頭上に主の手が置かれ、聖霊の炎に燃え立ってとびあがり、天よりの力に励まされ、この答えの使者であるマッセオ

に向かって『さあ、行こう！』と言ってカンナーラとベヴァーニヤ方面にむかった。ここで有名な小鳥たちへの説教がなされました。

## フランシスコの愛の昇華

「アッシジの貧者」の著者N.カザンツァキは冒頭でレオネ（聴罪司祭の弟子・三人の伴侶の一人）をして次のように語らせてます

「あの貴族ファバローネ・オフレドゥッチオの娘キアラに対するあなたの恋も？それを知っているのは私だけだ。気の小さい人々は、あなたが彼女の魂だけを愛しているのだと思っている。でも、なによりもまずあなたが愛していたのは、彼女の肉体だった。あなたはこの愛から出発し落とし穴と誘惑だらけの道を通り、長いたたかひを経た後に神のご加護でキアラの魂まで到達したのだ。しかもあなたは彼女の魂を愛しながらけっして彼女の肉体を諦めずそれかといって、指一本触れようとしなかった。この肉体の愛は、障害になるどころか、あなたを神へと導いた。なぜなら、神はあなたがおおいなる秘密を知ることをお許しになったのだから。どのような道を辿り、どのようなたたかひを経て、肉が霊になるのかという秘密を。女であれ、息子であれ、母であれ、祖国であれ、思想や神であれ、すべての対象にむかって、あるのは唯一つ、いつも同じ愛だ。愛のもっとも低い階梯においてであろうと、打ち克つこと、それが天国に通じる道を開くことである」（「アッシジの貧者」p11)

フランシスコはクララを愛していた。しかも気高く愛していた。この愛は肉体を通して魂にまで到達した。愛の昇華である。

クララ着衣（1212年春から1215年ラテラノ公会議）の間、フランシスコが「激しい肉の誘惑」に襲われて苦しんだことが伝えられている（オ・エンゲルベールの伝記）「苦しい修道生活を送るよりも、幸福な家庭を築き、子どもを育てて暮らす人生を憧憬する」という内容の苦しみ人間的な苦悩である  
フランシスコの「貞淑」の思想の根がここにあるのだろうか。

## 小鳥たちへの説教

『わたしの兄弟である小鳥たちよ！お前たちは神に感謝せねばならず、いつでもどこでも神をほめたたえねばならない。というのは、お前たちはどこへでも飛んでゆける、二、三枚の服、色もきれいな服装、働かなくてもえられる餌、創造主の賜である美しい歌声に、恵まれているのだから。お前たちは、種をまかず、刈り入れもしないが、神はお前たちを養い、水を飲むための河や泉、身を隠すべき山や丘、岩や絶壁、巣を作る高い木を与え、お前たちは紡がず、織らないが、神はお前たちを大切にされるのはお前たちを愛している証拠である。だから、わたしの兄弟である小鳥たちよ、恩を忘れずに、いつも熱心に神を讃えなさい！』

わたしたちの聖い父がこう語ると、小鳥たちはみんな嘴を開け、はばたき、首をのぼし、小さい頭を恭しく下げだして、さえずり体を動かしながら、聖フランシスコのことばを喜んでいることを示した。聖フランシスコはそれを見て大いに喜び、種々雑多な小鳥の大群がいかにもおとなしいのを驚嘆し、創造主を讃え、小鳥たちに創造主を讃えるように優しく勧めた。さて、それがすむと、彼は小鳥たちの上に十字を切って祝福した。すると、小鳥たちは不意に飛び立って、不思議に力強くさえずり、それから別々の方々へ飛び去った」(ヨルゲンセン著p171-172)



## ジャコマと出会う

1212年終わり頃フランシスコは会の様

子及びクララのことをイノセント3世教皇に報告する為にローマを訪れ、その地で托鉢をしているときに貴族のジャコマに出会った。夫人はフランシスコと仲間たちの活動やポルチウクラのことに関心をもっており、彼らを自宅に招いて温かいもてなしをしました。

ジャコマ夫人は数ヶ月前に夫を失い20歳を少しすぎたばかりで寡婦となり、子どもの養育と多くの財産を任せられた。

夫人は世俗にしながらフランシスコの教えを実践する「第三会」の創設に貢献した人である。フランシスコも後に起こる聖痕のことを話したり、臨終の時には側に居てくれるように頼んだ人です。

## 聖痕の準備、ラ・ヴェルナ山の土地を寄進される。

1213年 (31歳)~1214年 (32歳)

(1)説教権を認可してもらったフランシスコは、その年の春からはロマーニャ州でも説教をはじめた。5月8日オルランド・ディ・カッターニー伯爵からラ・ヴェルナ山にある土地の一角を寄進される。ラ・ヴェルナはアレッツォから車で15分位フォレスト・カゼンティネ国立公園内にある。静寂で、祈りにふさわしい場所です。そして何よりも特筆しなければならないのはここで1225年9月14日フランシスコが聖痕を受けるのです。

(2)1213年の冬から1214年にかけてスペインを經由してモロッコの回教徒に福音を宣べ伝えるべく出発しましたが、途中で大病にかかり（肺結核）引き返しました。彼は生来、体は弱く子どもの頃はよく熱をだして母親の手厚い看病を受けていた。その上「清貧」を目指して断食、托鉢による食生活、岩穴での睡眠等で肉体的な栄養状態は悪かった。これは終生続く修練でもあった。

(3)この年、チェラノのトマスが弟子に加わった。彼は聖フランシスコの第一伝記、第二伝記を書いた人物である。

## 宣教活動の発展に備える活動

### 1215年（33歳）

(1)クララ達の「清貧の特権」の許可を願った。

1215年ローマに向かい、第4回ラテラノ公会議（11月11日から30日迄）に出席、教皇イノセントにクララ達の「清貧の特権」の許可を願った。この時もジャコマ夫人の歓待を受けます

清貧の特権とは？

「フランシスコのように生きる生活様式を認めること。即ち、福音に従って生活すること。清貧と労働と祈りに生きること。姉妹たちは財産を貧者に施した後は、サン・ダミアノでは再びどんな財産も、自分の手でも、人を介してでも、受け取ることは出来ない。唯一の例外は、修道院が俗界から離れているのに必要なだけの、周囲の土地のついた修道院だけである。但し、この土地は、姉妹たちの必要を充たす菜園として耕された」

この特権はイノセント3世から認可されましたが、彼が翌年召天するとその後の教皇はしばしばクララに最低の土地と財産を持つように働きかけました。クララはこの会則の厳守を貫きいかなる妥協も追随も排除する努力を続けていきました。

彼女が自らの手でこの原則的な会則の認可を教皇から承認されたのはクララの召天の二日前でした。

(2)ドミニコ会の創設者ドミニコ・グスマンと出会う。

この出会いについて100年後ダンテは「神曲」の天国篇第11番で次のような描写をしている。

「セラフィムのように愛に燃えていたのはフランシスコであり、ケルビムのように智慧に耀いていたのがドミニコだった。しかし二人とも自分たちの業を同じ目的に向けたとき、一人の賞賛は、もう一人への賞賛となった」

### 1216年（34歳）

(1)ウゴリーノ枢機卿が訪れる

オステアのウゴリーノ枢機卿はフランシスコの聖性と人間的魅力に惹かれ始めて「小さき兄弟たち」を訪れ、その活動に好意を示し後にこの修道会の恩人となる。フランシスコも「自分の靈魂がウゴリーノ枢機卿の靈魂と溶け合っていると感じた」

(チェラノ第一伝記) ウゴリーノはイノセント3世の甥にあたり、後に1227年から教皇グレゴリオ9世となる人

(2)イノセント3世がペルージャで急逝する。

フランシスコは臨終に立ち会った。

イノセント3世はフランシスコのよき理解者であり、いつの頃からか「フランシスコ会の父」と呼ばれている(ベラルド・ロッシ著p135)

葬儀の次の日、新しい教皇にはホノリウス3世が選ばれた。彼は自分の財産の殆どすべてを貧しい人々に分け与えた非常に柔和で敬虔で素朴な人柄でした

## 1217年 (35歳)

(1)修道会総会で最初の管区ができる(組織化が志向される)

弟子たちの数が増え、活動が広範囲になり、小さき兄弟会は発展するにともなって、「平和の宣教」を伝えるために、アルプスを越えヨーロッパ、イベリア半島、イギリス、更にチュニジア、シリア、モロッコ、エジプトへと出かけることになる。その他各地でも弟子が増えた。それはフランシスコの考えも及ばないほどであった。情報不足のために多くの失敗が繰り返されたがその反省と学びが組織化という道をたどります。

伝道地域の拡大は地方別に管区に分けられ、各管区には管区長がおかれ、さまざまな規程が必要になる。イタリア国内に6カ所、国外に5カ所(スペイン、フランス、クロアチア、ハンガリー、パレスチナ)

情報の交換も必須である。フランシスコは年2回聖霊降臨祭(春)と聖ミカエルの祝日(9月29日)ポルチウンクラで修道会総会を1209年から開くことにしていました。

互いの教化の為に集まった兄弟たちは「いかに会則をよく守るべきかを論じ合った」  
「彼らは旅に袋もカバンも持たず、パンも金もたずさえず、靴も履かない、修道院も教会も畑やぶどう畑や家畜や家や財産や、頭をのせるべきものさえ持たない。毛皮も亜麻布も着ず、頭巾のついた毛の僧衣だけをつけ、マントもえりも上着も別の衣類も身につけない。食事に招かれれば、出されたものを食べる。施しを受けても、次の日の為に蓄えない。ことばだけでなく、聖い生活と完全な行状によって、あらゆる身分の人々を動かして、世を軽んじさせ、家庭も大きい財産も捨てさせて、そまつな僧衣を縄という小さい兄弟たちの修道服を着させる」

原始会則の確認をした後でフランシスコの説教があった。

「すべてを捨てない人は、私の弟子になれない」「他人に平和をもたらすために行くあなたがたは、いつも心に平和を持ちなさい」という彼の原則を徹底した趣旨の説教を詩人のように語った。

「愛と智慧のある所には恐れも無知もない。忍耐を謙遜のある所には不安も怒りもない。貧しさと喜びのあるところには欲もけちもない。落ち着きと思慮深さのある所には心配も動揺もない。主への恐れが入り口を守る所には悪い敵は入れられない。慈悲と賢明のある所にはぜいたくも無情もない」

ようこそ、女王なる智慧よ

主がお前とお前の姉妹、聖く純な無邪気をお守りくださるように！

清い貴婦人清貧よ、主がお前とお前の姉妹、聖い謙遜をお守りくださるように！

聖い貴婦人愛よ、主がお前とお前の姉妹、聖い従順をお守りくださるように！

すべてのいと聖い徳よ、主に由来するお前たちを、主がお守りくださるように！

聖い智慧よ、悪魔とそのあらゆる悪事を赤面させよ！

聖く純なる無邪気よ、この世のあらゆる賢さと肉の賢さを赤面させよ！

聖い清貧よ、あらゆる欲望と貪欲とこの世の憂いを滅ぼせ

聖い謙遜よ、あらゆる高慢と世俗の人の俗事を赤面させよ！

聖い愛よ、あらゆる悪魔と肉の誘惑、あらゆる肉の恐れを滅ぼせ

聖い従順よ、肉体のあらゆる欲求を滅ぼし、肉体を精神に服従させ、人間が地上のあらゆる人間に仕え、人間だけでなく、おとなしい獣にも仕えられるようにせよ」

註：「貴婦人清貧」「貴婦人愛」はフランシスコ流の擬人法で「清貧」を貴婦人と呼んでいる。清貧が彼をキリストのもとへ導く者とみなし、貴婦人清貧に深い尊敬と忠誠を示す騎士道精神の現れである

ベラルド・ロッシも以下のように記している

「フランシスコ会の初期に資料によれば「貧しさ」とは「キリストの花嫁」のことであり、雅歌（旧約聖書）に出てくる「おとめ」のことです。謙遜な僕フランシスコはその「おとめ」に仕えました。なぜなら、キリストの花嫁に仕えることで、霊的騎士が示せる最上の表現と考えたからです」(p140)

## (2) 教皇の支援

然し原始会則では大きくなった組織を統率することができなくなったのでフランシスコは5月と12月の2回ホノリウス3世を訪問してウゴリーノ枢機卿をフランシスコ会の特別保護者（自分たちの父）になってもらった。このことにより海外宣教が支障なく進むようになる。理念はフランシスコから発し、ウゴリーノ枢機卿によって組織的に運営（法制化、組織運営の諸問題の実践的解決）されフランシスコ会が継承されていった。

5月の総会で海外宣教が決められ、フランシスコ会最初の11管区が設立された。イタリア国内に6、国外に5、スペイン、フランス、ドイツ、クロアチアとハンガリー、パレスチナであった

## 1218年(36歳)

(1)1218年6月3日の総集会にはドミニコ・グスマンが参加している。ドミニコ会はフランシスコを見習って彼の修道会も何も所有しないことに決め、その許可をもらう為にローマに向かう途中に立ち寄ったと言われています (p209 ロッシ著)

(2)1218年には兄弟エリアを団長としてエルサレムへ送り、シリアとパレスチナとの接触に成功し管区を創設し、アナトリア、ギリシャ、クレタ、キプロスへと宣教活動を広めた。ここでエリアはドイツ人最初の弟子を得た。(その名はシュバイアーのツェザリウス、博学で方々へ旅をした聖職者、組織を神学的に指導した人物)

## 中東への宣教に出る

### 1219年 (37歳)

(1)中東への宣教に出る。悪性の眼病にかかる。

①この年はフランシスコの生涯の中でも最も際立って記念すべき年となります。

それは殉教を覚悟した中東への旅です

1219年の春の修道会総会(ウゴリーノ枢機卿が出席)で2年前の失敗の反省の上に立って、再び海外宣教が上った。この出発に先立ってウゴリーノ枢機卿が海外各地の司教座に紹介状を送ってくれた。この時、6人の弟子がモロッコに伝道にでかけました。その目的はサラセン人たちに宣教することで、一人は途中で病になり離脱しますが、5人はモロッコへの途中セビリヤに着いて回教寺院で説教を始めた為に投獄されます。モロッコにいたミラモリン(当時はアブー・ヤクブ)は寛大に処し帰郷させようとしたのですが5人は再びモロッコへ舞い戻り、再び説教を始めたため、諸手続を経てから5人は1220年1月16日殉教します。クララはこの事件に心を痛め自分も殉教の旅に出るとフランシスコに懇願しますが許してもらえませんでした。

②スルタンとの会談

フランシスコはカッターニーを伴って1219年6月24日第5回十字軍の船に乗ってアンコーナを出港し聖地へ向かいました。一ヶ月の船旅の後、今のアッコ(イスラエル・テルアビブの近く)に着きエリアの出迎えを受け、合流してエジプトのダミエッタに向かいます。目的は異教の前に立って、神のことはを宣べ伝えること。話合いによる和平を進めることでした。

然し加わった十字軍は極度に頹廢墮落しており、その従軍兵の精神を正すためにフランシスコは多くの説教をしなければなりませんでした。内部の精神的なケアをしながらもフランシスコは長年の夢「異教徒に宣教すること」をあきらめなず、8月中旬にエジプトに到着し、9月、講和会談の目的でエジプトのナイル川のほとりのダミエッタで回教徒のメレク・エル・カメルを殉教を覚悟して訪れました。

ダミエッタに到着後も荒々しい対応にもめげず「スルタン、スルタン」と連呼し殉教を覚悟して面会にこぎつけ、更に説教をします。これはジョットによって描かれた絵でも有名です（有名な話・割愛）

スルタンは彼の説教を悪くは取らず「どの信仰が神のお気に召すかを神がわたしにお示しくださるようわたしのために祈ってくれ！」とってこの大胆な福音宣教者を退却させます。スルタンは部下たちの厳しい要求を入れずに寛大な取り計らいをしました。

13世紀のヨーロッパは対話の時代ではありませんでした。争いと対立の時代であった（冒頭記載）この時代に異教のスルタンと話合いによって問題を平和のうちに武器によらず解決できるとフランシスコは考えたのです。彼の十字軍参加の目的は戦いではなく対話への挑戦でしたが、彼の失望と傷心は深まります。

十字軍は再び軍勢を指揮してダミエッタを11月5日陥落し十字軍による残虐な奪略が始まり、フランシスコは落胆と恐怖と嫌悪に満ちてそこを立ち去りエルサレムに向かいました。

### ③フランシスコの十字軍の考え方

フランシスコの十字軍について、暴力の代わりに神の言葉を、武器の代わりに奉仕をの心を、戦いの代わりに平和を携えるものでなければならぬと考えていました。武力の派遣については終始反対の考えを持っていました。武力によらない解決、対話するために第5次十字軍の船に乗ったのです

滞在は翌年の夏頃迄と考えられていますが、この間にエジプトでかかった眼病が思わしくなく、結核性マラリアによる熱に侵され肉体は極度に衰弱をします。

## (2)ベトレヘムでの降誕祭

エジプトから船にのりハイファに着きティベリア湖を周り、エルサレムからベツレヘムへの道程で、12月24日の降誕祭をベツレヘムで祝い、その光景に感嘆したフランシスコはその祭典の方法を後の1223年グレッチオで再現することになります。

又、ゴルゴダの丘にひざまずいてイエスの痛みと苦しみを感しながら熱心な祈りを捧げた。イタリアでは回教徒に捕まったとか溺死したとか殉教したとか変な噂が流布したり、組織運営に亀裂が生じたとの知らせを受けて急いで帰国することになりました。

### (3)学問と信仰に葛藤

1219年彼の弟子の一人がフランシスコの猛反対を押し切ってフランシスコ会のための学舎を造りました。（この年ドミニコ会がボローニアに神学校を造っています）フランシスコは学がなくても「悔い改め」れば誰でも救われるという信念を生涯貫いています。

反面フランシスコが歴史の名を残したのは彼が反対した人達が造った学校や修道院の存在でした。弟子たちは教えには忠実に組織を造るよう心がけののです。これも偉業です。。師の反対に屈していればカリスマ一代の活動で終わっていたと想像されます。

1200年前半にパリ、ボローニャオックスフォードに続いて8校がイタリア国内（パドヴァ、ローマ、アレッツォ、ナポリ等にできた。当時は学問への扉が開いた時代でした。

## 組織の拡大に伴い会則を整える

### 1220年（38歳）

(1)1220年1月16日モロッコで5人の弟子が殉教する

(2)フランシスコの辞任

1220年9月22日フランシスコの組織を支援するためにウゴリーノ枢機卿が動きホノリウス3世に「大勅書」（1223年11月認可）を願いで「会則」に従わない者は兄弟会から閉め出された。

9月29日フランシスコは眼病の悪化と組織化を嫌って指導者としての地位を辞任して弟子ピエトロ・カッタニーに任せた。然しフランシスコへの尊敬と敬意は高揚し実質的には死に至るまで彼はカリスマとして弟子たちを見まもり導きました。

### 1221年（39歳）

(1)1221年春「<sup>むしろ</sup>筵の総集会」が開催され「勅書によって裁可されない会則）が採択された。

兄弟全員が参加できるものとしては最後の集会となり、4～5千人が集合した。大勢の人を滞在させる場所はなく畑に筵を敷いて集会が行われたのでこの名前がついた。修道会が発展するにつれて、「会則」も細かく広範囲にならざるを得ない。

1210年の簡単な規則、「使徒的生活法」だけでは組織の統率がとれなくなった。会則は時代と共に少しずつ変化をとげ、2年間をかけて「1221年の会則」（勅書によって裁可されない会則）が完成するにいたった。それは「祈り、讃歌。感謝」のことばで満ちています。「挨拶をするときはこの家に平和がありますように」と言

うことを再び弟子達に命じている。(1209年の原始会則にも定められていた) 聖書の教えに従順に書かれているが特徴的なことは「悔い改めの勧め」です。

従って法的性格を持たず教皇には提出しませんでした。

その一例を示すと次のような文があります。多くの省略を恐れず引用します。

「わたしたち哀れな罪びとは、聖名を呼ぶに値しませんから、心からお願いしたいのは————へりくだってお願いいたします。」

「小さい兄弟、役に立たない僕であるわたしたちは、へりくだって切願いたします。(あらゆる職業・人々が列挙されているが割愛) あらゆる民族、種族と言語、現在と未来のあらゆる国民と人、これらの人々が真の信仰を改宗にいつまでもとどまりますように。

わたしたちすべてに胸の底から、心から、真情を傾けて、

わたしたちの全能力をあげて、

わたしたちの全理性の能力をあげて、

わたしたちのあらゆる努力を尽くして、

わたしたちのあらゆる愛を傾けて、

わたしたちのあらゆる志望と意志をもって、

わたしたちの主なる神を愛させてください

主なる神はわたしたちすべてに肉体と精神と生活のすべてを、過去も今も与えられ、わたしたちを創り救われ、清い慈しみからわたしたちを助けようとおぼしめされ、惨めで墮落し、むさくるしく忘恩で悪い宿なしに、あらゆる良いものをくださり、今も毎日くださっているからです。

わたしたちにどこまでも、いつなんどきでも、毎日たえず、本当にへりくだって、神を信じ、心に留めさせてください。

1221年フランシスコの希望によりドイツに宣教師が派遣された。

(2)1221年12月16日ファエンツアの争いが起こる。

ファエンツア市長がことの一大事に「贖罪の兄弟」(第三会会員)に武器を取ることを命じたが彼らはそれを拒否した。市長が罰則を科そうとするとホノリウス3世が「贖罪の兄弟」の人たちを守るために各都市に文書を送り彼らを保護しました。(教皇ホノリウス3世の腹心がウゴリーノ枢機卿、後のグレゴリウス9世。フランシスコはこの二人を恩人と知っている)

(3)「贖罪の兄弟」とは

「第三会員」とも呼ばれている。

第一会員は財産を処分して貧民に施し裸になって入門する男子修道会

第二会はクララが最初の人で男子同様に自らの財産を処分して修道院内で祈り且つ働くという女子の修道会。

第三会とは在家の市民たちでフランシスコの使徒的生活と信仰を同じくする者、1212年にフランシスコがローマで出会ったジャコモ夫人、1213年にラ・ヴェルナの土地を寄進したオルランド・ディ・カッターニー伯爵等がその結成に貢献したと言われています。そのころから自然発生的に輪が広がっていたようです。

フランシスコ修道会に入会できない市民たちでフランシスコの生き方に賛同するものは誰でも入会できた。既に1209年にはその受入はできており「すべて兄弟である」とのフランシスコの理念が反映され多くの市民が入会をしている。ファエンツァの争いはその会則を守ったフランシスコ第三会の会員が武器をとらなかったことに起因する。ウゴリーノ枢機卿によって助けられたが、将来誰の支配下になってもこの会則が認められることが必要である。その為に確固たる会則の準備に入ったのです。

この(2)事件を契機にウゴリーノ枢機卿は各地のばらばらの「贖罪の兄弟」を組織化することを試み「会則」を作成しました。

「贖罪の兄弟」の規則は概ね下記のような内容です。

- ①彼らは世の中にあり、世を捨ててはならない。
- ②兄弟会に入るとすぐ負う義務は、不正に得た富をすべて返すこと（放棄すること）
- ③教会へ10分の1税を納めること。
- ④遺産相続の争いを避けるため入会后3ヶ月以内遺言書を書くこと
- ⑤緊急の場合のほかは誓いをしないこと、
- ⑥武器を携えぬこと、
- ⑦公職につかないこと。
- ⑧特別のみすぼらしい服装をし、
- ⑨祈りと愛の業につとめなければならぬ
- ⑩互いに平和にすべき

このようにして「第三会員」会が創立された。

## 1222年（40歳）

1222年学研派の代表エリアはフランシスコの会則を、学問を広める会則に改めようとウゴリーノ枢機卿に働きかけたが、フランシスコは「知識は高慢にするが、愛は信心深くする」と使徒のことばで反論していました。彼が心底嫌っていたのは、学問を鼻にかけること、学問を自慢のたねにする利己主義でした。有名人だという空しい誇りに胸をふくらませ、大聖堂の説教壇に立つよりは、高い山の岩穴か庵でひざまずいて、人知れず孤独のうちに同胞のために神に祈るのが、ずっとよいことを彼は感じていました。ことばや理屈でなく、祈りと生活（実践）を重んじた終生

変わらない信念でしたが、次第に弟子の考えも受け入れるようになり、ボローニア大学で神学を教える弟子も現れたました。一方でフランシスコもボローニヤの街角で「無学な者」の説教を続けました。大学の街での無学な者の説教には少なからずの人々が驚きました。説教の内容は不和を和解させ、平和をつくることでした。「衣は汚く、姿はみすぼらしく、顔立ちは良くなかった。だが、神が彼のことばに大きい力を与えたもうたので、争って血を流していた多くの貴族たちは、感動して仲直りをした。男女を問わず皆が彼を敬い、彼に帰依したので、彼の方へ群れをなしておしかけ、衣の端でもちぎり取り、衣の裾にでも触れようとした」

## 1223年(41歳) 会則が勅書によって裁可される

### (1)1223年会則が勅書によって裁可される

1210年にローマ教皇による「口頭の裁可」から弟子が増えるに従って会則は現実に対応出来るように変化していった。フランシスコが師と仰ぐウゴリーノ枢機卿の助言や側近の弟子たちの意見を入れて原始会則は緩やかに変更された。その中でも学問知識への道、学舎の建設、聖堂の建造はフランシスコには気が進まないことが多かったが、原始会則も形を留めて継承されています。

- ①序文、「従順と清貧と貞潔において福音に従って生きる」義務
- ②金銭を受け、何かを所有することへの厳しい禁止
- ③恥じずに施しを乞う掟（日常生活を支えるために与えられるものは頂く）
- ④質素な服装をし、麻の粗布や他の布きれでつぎはぎをしてもよい
- ⑤旅をするときは、兄弟たちは誰に対しても穏和で、平和を好み、控えめで、謙遜でなければならない。互いに争ってはならず、だれも裁いてはならない。
- ⑥家に入るときには「平和がこの家にありますように」と挨拶をし、福音のことばにしたがって、出されたものは食べてもよい。
- ⑦土地の司教が反対したら、説教をしてはならない。聖職者への従順はフランシスコの最初からの姿勢であった。
- ⑧女子修道院に入ってはならない。
- ⑨フランシスコ会の司祭はローマ・カトリック教会の習慣に従って聖務日課の祈りをし、修道士は「主の祈り」を唱える
- ⑩字の読めない者は、読み方を習ったりせず、なにより大事なものは、あらゆる高慢、虚栄、ねたみ、非難、不平、貪欲、この世の憂いをまぬがれ、主の霊をもち、神のみ業をなし、常に清い心で祈り、迫害や病いにおいて謙遜と忍耐を保ち、わたしたちを憎み非難し正しく導く人を愛することである「あなたがたの敵を愛し、あなたがたを迫害し非難する人のために祈りなさい。義のために迫害される人は、幸いである。天国は彼らのものだから。最後まで我慢する人は救われる。

この会則は「解釈せずに、解釈なしに」従うことが伝統的に継承されている。この掟は「生命の書、救いの希望、福音の核心、十字架の道、完全の立場、天国への鍵、永遠の生命の予感と担保」だった。（ヨルゲンセン著p286）

## (2)グレッチオで降誕祭

この冬、グレッチオで降誕祭を1219年にベトレヘムで見た方法で祝いたいと計画した。「わたしは一度是非真剣に神の御子のご降誕を、自分のこの眼で、どんなに御子がわたしたちのために貧しくみじめになることをのぞまれたかを見てみたい」といいグレッチオの「修道院の側の森に岩穴が一つあります。そこに干し草をいっぱいづめたかいばおけを置いてください」と命じた。

フランシスコの清貧の思いの原風景を具体的に見て感じとり、弟子たちにも見せたかった。ヨーロッパの教会では今日でも忠実に行われているところが多くあります。その最初の発案者はフランシスコでした。フランシスコはできるだけ「福音に従って生きる」という信条を更に強固にしていきます。

## 聖痕を受ける

1224年（42歳）

### (1)使徒に徹底的に倣う生活

1224年から始まる最晩年の大部分をリエティの谷で過ごしました。この谷はフランシスコの最初の布教の旅の舞台でありました。肉体は弱り、特にエジプトに行ったとき眼病（トラコーマ）が悪化して、時には殆ど見えなくなる時がありました。その治療に灼熱した鉄でこめかみを焼くという粗療法も受けています。（後述）フランシスコはもともと頑強な体質ではなく、子どもの頃にはよく熱をだしています。その後の長い断食、少しの睡眠をむき出しの岩が寝床とするという生活が続いていました。岩穴を好んで選んだのはイエスの次のことばの実践でした。

「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」

（マタイによる福音書8章20）

枕は石か木でしばしば座ったまま眠る。こんなふうには20年も過ごしてきたので肉体は弱くなって、血を吐いてもう駄目かと弟子たちに思われたことが何度かありました。このようになった自分を「老衰した男」と呼んでいます。人々を天国に導こうとする情熱は冷めやむことはありませんでした。

この年の聖霊降臨祭の定例の総会では人前では話が出来ませんでしたので兄弟たち（弟子）に手紙を書いて奨励をしています。

「あなたがたの小さな僕であるこの兄弟フランシスコは、神ご自身である愛において、またあなたがたの足を接吻する心で、あなたがたにせつにお願いしたいのは、あなたがたが謙遜と愛をもって、わたしたちの主イエスキリストのみことばをどれ

も受け入れ、実行し、それに完全に従うことです。みことばは霊であり生命だからである。このことばを喜んで受け入れ、理解し、それに従って生き他人の手本となり、最後まで耐え忍ぶ者はだれも、三位一体の神に祝福されるように！アーメン」  
「弟子の足を洗う」謙遜と愛、従順というフランシスコの信念が息づいている。この従順がフランシスコの平和の源の一つになっている。あらゆる我意の完全な放棄、あらゆる命令や暴力への完全な従順、「あなたの右の頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。」（ルカによる福音書6章⑳）

社会問題に関して世俗の権力を持つ行政官（市町村長、執政官、裁判官、校長等）に対しても手紙を書いている「忙しさにまぎれて唯一の大事を忘れないように」勧めています。

フランシスコは平和を実現するために三つのことを説き自ら率先して手本を示しました。

①従順、②祈り、③普段の喜び（これらについては最終号で記します）

## (2) 聖痕を受ける

### (1) ラ・ヴェルナ山に向う

1224年8月健康を回復したフランシスコはリエティの谷を出てラ・ヴェルナ山に向かいました。8月15日の聖母マリアの被昇天祭から9月29日の大天使ミカエルの祝日までの40日間の断食をし、静かに祈り、瞑想に浸りたいと思ったのである。そこには1213年オランダ伯爵によって寄贈された土地がありました。そこは険しい岩の多い1200mの山で静かで祈りに適した所でした。その途上でフランシスコの体力は衰弱し弟子たちは農家にいつて師を乗せるろばを借りに行った。その農民は彼らを励まし、さらに「あなたを信用している人が沢山いるのですから、大事になさいよ」といつて山頂までの案内も引き受けてくれた。感動したフランシスコはひざまずいてこの農民の足に接吻してその戒めに感謝しました。山の中腹で一息いれていると「たちまち小鳥の群れがやって来て、楽しくさえずり、羽ばたきしながら挨拶した。聖者の頭にとまるものもいれば、肩や膝や手にとまるものあった。フランシスコはこの不思議を見て、『愛する兄弟たちよ、わたしたちの兄弟小鳥がこんなに歓迎する、この静かな山に住むのは、きっとわたしたちの主イエス・キリストのみ旨にかないますよ』と言った。オランダ伯爵はこれを聞いて喜び翌日には大勢の家来を連れてフランシスコを訪問し援助を申し出た。オランダ伯爵の親切に甘えて忠誠を誓ったわたしたちのご主人清貧を傷つけないように弟子たちを戒めることを忘れなかった。

フランシスコは弟子たちから離れて暗い湿った岩穴がある固い岩を寝床として「祈り」に専念した。近づけたのは兄弟レオーネだけ、しかも一日2回の時間まで決められて、祈りの妨げになるものを一切遮断した。

祈ることはたくさんありすぎた。罪の告白と悔い改めの祈り、自分の健康から兄弟たちの肉体と魂の平安、組織をめぐる争いの解決から小鳥たちへの想いに至るまで。

## (2) 9月14日未明の祈り。

断食のあける朝の日の出を待って顔を東の方に向け、フランシスコは腕を広げ手を上げて「おお、主イエス・キリストよ、死ぬ前に、二つのお恵みをくださるようお願いいたします。

第一のお恵みは、おお、やさしいイエスよ、あなたが御苦難で耐えぬかれた苦痛を、わたしの心と体でできるだけ感じることです（キリストの苦難）

第二のお恵みは、神の子であるあなたの燃え立つ愛、あなたを駆り立てわたしたち罪人のために苦しむようにした大いなる愛を、わたしの胸の中でできるだけ感じることです（キリストの無限の愛と喜び）」

## (3) 聖痕を受ける



長いこと祈っている間に、神がこの二つの願いをききとどけて、感じることを許してくれるという確信を得ました。そして幻影が現れるのを見た。不思議な幻影が消えるとフランシスコの胸には、激しい炎と神への生き生きとした愛が残り

り、キリストの苦難の不思議な疵痕きずあとが付いた

「釘のようなものがすぐ手足に現れだし、その真ん中を貫いているように見えた。釘の頭は手のひらと足の甲に出ていて、釘の先は手の裏と足の裏に出ていた。（中略）おなじように右胸のわきに、槍で突いた跡が現れた。傷痕はないが、赤く血がにじんでいて、そこからはしばし聖フランシスコの血が流れ出て、彼の衣をズボンをぬらした（ヨルゲンセン著p338）

フランシスコは身に起こった不思議を長いこと隠しておけなかった。傷がひどくて痛み他人の手をかりなければ日常生活がおくれなかった。傷口には包帯を巻かねばならなかったし、歩くことも困難であった。弟子たちが包帯を替えたが「フランシスコがキリストとともに苦しもうと思った木曜日から日曜の朝までは」何もさせなかった。この苦しみの中でフランシスコは「いただいたお恵みへの感謝のために」という聖痕の讃歌を詩っています。

#### (4) 聖痕の讃歌

おんみは聖く、主なる神、神々の天主、奇跡を行う唯一の神

おんみは強く、偉大で、いと高い。おんみは全能天地の聖い父にして王

おんみは三位一体、主、神々の天主。

おんみは善、全き善、最高の善、主、生ける真の神

おんみは愛、智慧、謙遜、忍耐。

おんみは美、安全、平和、喜び

おんみはわれらの希望、正義と節度、われらのあらゆる富

おんみは柔和、われらの保護者、防衛者、護衛。われらの避難所と力

おんみはわれらの信、望、愛、おんみはわれらの魂の甘美

おんみは無限の善、大きい偉大な主なる神、

全能、善、慈悲、われらの救い主

#### (5) ラ・ヴェルナ山からポルチウクラに向う

この後ラ・ヴェルナ山に2週間滞在した後9月30日、山を下りてポルチウクラに向かう。惜別のことは弟子たちへの戒めと激励、聖なる山、寝床にした固い岩への感謝、兄弟と呼んだ鷹（朝の目覚めを知らせてくれた）への感謝に満ちています。

その道中はどこでも凱旋の行列のように民衆に囲まれポルチウクラに到着したのは11月半ばでした。そして、若いころの熱心さが戻りすぐ布教に出ました。またハンセン病患者の所に行き、みずから重傷の患者の体を洗い清め、傷を癒やすという奇跡を起こしました。

フランシスコの改心はハンセン病患者への接触から始まり、死に至るまでその奉仕は留まる事はありませんでした。

その後間もなく肉体は更に衰弱し、弟子のエリアは師の命は後2年だと告げて医者にかかるように勧めましたが、神のおぼしめしのままになることを願いサン・ダミアノ修道院に近くに小屋を建てクララの看病を受けることになりました。

「太陽の賛歌」に着手する

1225年（43歳）

## (1)太陽の賛歌①

1225年の夏、目もくらむほどのイタリアの夏の太陽は眼病を患っているフランシスコには厳しく、全く目が見えなくなっていました。そのうえ野ねずみの群れに悩まされ、眠っているフランシスコの顔の上も走り回ったので夜も昼も休むことができませんでした。哀れで惨めで、睡眠不足、衰弱の中で、フランシスコの輝かしい傑作「太陽の讃歌」が作られ始めます。

### 太陽の賛歌①

いと高い、全能の、善い主よ  
賛美と栄光と誉れと、すべての祝福はあなたのものです。  
いと高いお方よ  
このすべては、あなただけのものです。  
だれもあなたの御名を、呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように  
すべてのあなたの造られたものと共に  
わけても兄弟である太陽と共に。  
太陽は昼であり、あなたは、太陽で私たちを照らします  
太陽は美しく、偉大な光彩を放って耀き、  
いと高いお方よ、あなたの似姿を宿しています。

私の主よ、あなたは称えられますように  
姉妹である月と星によって。  
あなたは、月と星を、天に明るく、貴く、美しく造られました。

私の主よ、あなたは称えられますように  
兄弟である風によって。  
また、空気と雲と晴天と、あらゆる天候によって。  
あなたは、これらによって、  
ご自分のつくられたものを、扶け、養われます

私の主よ、あなたは称えられますように  
姉妹である水によって。  
水は有益で謙遜、貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように

兄弟である火によって。  
あなたは、火で夜を照らされます。  
火は美しく、快活で、たくましく、力があります。

私の主よ、あなたは称えられますように  
私たちの姉妹である、母なる大地によって。  
大地は、私たちを養い、治めさまざまな実と色とりどりの草花を生み出します。  
(川下 勝著「アッシジのフランシスコ」清水書院刊より引用)

この「太陽の賛歌」はラテン語ではなくフランシスコが日常話していた地方のことばで書かれています。民衆の言葉で語る詩です。ダンテに先んじること100年前です。

## (2)目に灼熱の手術を受ける

その後、ウゴリーノ枢機卿や弟子たちやクララの勧めでリエティに滞在していた教皇付きの医師にかかることを決意して骨と皮ばかりになった肉体、その痛みを抱えてサン・ダミアノを出発します。聖痕があっても歩けるような靴をクララが作ってくれていたの歩いの出発でした。リエティの谷で夏から翌年の春までウゴリーノ枢機卿の保護もとで療養しました。この冬は医師の勧めがあつてを温暖なシエナに転地しました。

治療は大胆で両こめかみを灼熱した鉄で焼灼するという、当時では有効とされていたようですが、これは特に狂犬病に用いられたものだとされています。医者が焼灼を始めると弟子たちは肉が焼ける音を聞いて逃げてしまいました。フランシスコは手術の後「焼き方が足りなかったら、もう一度やいてください。いっこうに痛みませんから」と言っただけだった。医師の勧めがあつて温暖なシエナに移ります

召天を目前にして

1226年（44歳）

## (1)シエナの遺言

4月のある夕方、彼は胃の病が原因で吐き気を覚え、激しく力んだため嘔吐し、それが夜中から朝にかけて続いた。衰弱と痛みのために今にも死にそうに思われた。弟子たちの要望でシエナの遺言がなされました。

「書き記してください。現在この修道会にいる兄弟たち、そして世の終わりまでに、入ってくる兄弟たちみんなをわたしが祝福すると。わたしは、衰弱し、病苦のために話すことができませんが、現在と将来の兄弟たちに、わたしの望みと、わたしの

意向を、短く三つのことばで示します。わたしの思い出、祝福、遺言を大切にし、今までわたしがみんなを愛したように、そして今も愛しているように、互いに愛し合いなさい。そして、わたしたちの貴婦人である聖なる『貧しさ』を常に愛し、守りなさい。聖なる母である教会の高位聖職者と聖職者には常に忠実に服従しなさい」

## (2)アッシジの司教館に移る

フランシスコのいまわの唯一の願いは、アッシジをもう一度見ることでした。少し回復したところで弟子のエリアに付き添われてアッシジに向かう。（その途中最初の休憩をコルトーナでとる）エリアはその願いを叶えるためにある工夫を必要とした。既にフランシスコは万人憧れの聖遺物になるはずであるので、ペルージャ市民は出発を邪魔するだろうと恐れ、重体の師を回り道をしてアッシジの護衛をつけて夕方アッシジに着いた病人は司教館に寝かされ、周囲には見張りが立てられました都市間の戦いがどんなにまで過酷であったかを示す状況です

## (3)太陽の賛歌②

ここでフランシスコが知ったことはある事柄に対して市長と司教が公然と対立し、司教が市長を破門すれば、市長は全市民に司教との商取引を禁じるということでした。6月のことであった。病に伏すフランシスコは「仲直りさせないのは、神の僕であるわたしたちの大きな恥です」と弟子たちに言って、前に作ってあった太陽の歌に新たに二節を作詞し、市長に司教館に来るように使いをやり、司教にもお出でを願わせ、招かれた二人は司教館広場に集まりました。この場所は19年前フランシスコが父に衣服を返したところでした。すると小さい兄弟たち二人が歩み出て、まず、既に出来上がっていた太陽の歌を歌い、それから新しい二節を歌いました。

「たたえられよ、わが主よ、おんみへの愛ゆえに許し  
病と苦しみに耐える者によって、  
じっと平和を守る者は幸いである、  
おんみに、いと高い者よ、栄冠をさずけられようから」（永野藤夫訳）

川下 勝訳も記します

私の主よ、あなたは称えられますように。  
あなたの愛のゆえに赦し、病と苦難を、耐え忍ぶ人によって。  
平和な心で耐え忍ぶ人々は、幸いです。  
その人たちは、いと高いお方よ、あなたから 栄冠を受けるからです

二人の兄弟たちが歌っている間、一同は聖堂で福音書が読まれるときのように手を組んで立っていた。歌が終わりになり、最後の句が歌われると、市長は一步前に出て、グイド司教の前にひれ伏して言いました。

「わたしたちの主イエス・キリストとその僕フランシスコへの愛のために、あなたを心から許し、あなたのお気に召すようにしたいと思います！」すると司教はかがんで敵を助け起こし、抱いて接吻していった

「職務がら、謙遜で平和を愛するのが、わたしにはふさわしい。それなのに生まれつき短気だから、このわたしを大目にみてほしい」

兄弟たちは司教館に入り、フランシスコが太陽の歌で平和を乱す悪霊に勝ったことを報告した。

#### (4)太陽の賛歌③

フランシスコは8月のある日、もう長く生きられないことを感じて医者に見せました。はじめ医者は「医師に許されている嘘」をついて彼を慰めましたがフランシスコは「本当のことを言って下さい」と迫ります。医師ははっきり言った「わたしの見たてでは9月末か10月初めまで生きられます」

フランシスコは一瞬黙っていたが、両手を上げて「では歓迎します。姉妹、死よ！」このことばが彼の心の「詩の泉」を掘り当てたように、彼は太陽の歌にこの最後の節を書き加えました

「ほめられよ、わが主よ、わたしたちの姉妹である肉体の死によって生ある者はだれもそれを逃れられない。

大罪の状態死ぬ者は災いである。

おんみのいと高いみ旨を見出すものは幸いである、

第二の死にそこなわれることはないから」 (永野藤夫訳)

川下 勝訳

私の主よ、あなたは称えられますように、

私たちの姉妹である、肉体の死によって。

生きているものはだれでも、死から逃れることはできません。

大罪のうちに死ぬ者は不幸です。

あなたの、いと聖なるみ旨のうちにいる人々は幸いです。

第二の死が、その人々を、そこなうことはないからです。

私の主をほめ、称えなさい。

主に感謝し、深くへりくだって、主に仕えなさい。

その時からフランシスコは毎日しばしばこの歌を歌ってくれるように望んだ。そして臨終の床から全生涯を回顧し哀歎の情をもって改心当初のさわやかな一時を詳しく述べ、又、短い強烈な文章で忠実な弟子たちの将来を戒めた。その長い遺言の中でも「主がわたしにお示しになった挨拶は主があなたに平和をお与えになりますように」が中核を占めています。

#### (5) ポルチウクラに戻る

フランシスコは最後はポルチウクラに戻ることを望みグイド司教の指導でそれは進められました。弟子たちが病人を司教館から運び出したときには長い行列ができていました。アッシジとポルチウクラの中程にハンセン病院、聖フランシスコの改宗の原点、サン・サルヴァトーレ・デッレ・パレティに着いたとき、フランシスコは担架を下ろすように命じました。

「さあ、わたしの顔をアッシジの方へ向けてください」と言った。

一瞬深い沈黙が生じたが、病人は兄弟たちに助け起こされ、そして懐かしい故郷の風景と空をなかば見えない目で見渡した。「わたしはここを出て行き、この土地とこの市に死ぬために戻ってきた」と眺めたことだろうと推察します。その風景は今もアッシジに残っています。

#### (6) フランシスコの最後の晩餐

病人はポルチウクラ礼拝堂の数歩後ろの小屋に寝かされた。

10月1日その日は木曜日であった。フランシスコは弟子たちを集めてひとり一人を祝福した。それから力尽きて眠った。然し翌日金曜日の早朝ひどい痛みに目覚めた。弟子たちは皆ずっと集まっていた。彼はまだ木曜日だと思っていた。そして、主が弟子たちと最後の晩餐をともにした日だと思って、彼はパンを持ってこさせ、それを祝して裂き皆に分け与えた（パンを裂く力もなかった。弟子が手伝った）

「さあ、聖書をもってきて、聖木曜日の福音を呼んでください！」と彼は言った。誰かが「きょうは木曜日ではありません」と言った。「木曜日だと思っていたのに！」これがフランシスコの答えであった。聖書が持ってこられ、夜が明け初める頃、フランシスコの臨終の床の上に聖書のことばが響いた。そこには彼の全生涯をすべての教えがこめられています。

ヨハネによる福音書13章①～⑮を引用します

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。

イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。

シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいるのですか」と言った。

イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。

ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」

イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのため、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」

イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。

あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。

ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。

わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。（ヨハネによる福音書13章①～⑮）

10月3日土曜日医師が来ると、永遠の生命への門はいよいよいつ開かれるのかと彼は尋ねました。弟子たちに「灰を頭に播いてくれ、そして修道服を脱がせ粗末な下着姿にするよう」に頼んだ。そしてむき出しの大地に横たえてもらった。「裸で裸のキリスト」のあとに従った

夕方彼は異常な力で歌い出した。詩編第142篇であった。「声をあげ、主に向かって叫び、声をあげ、主に向かって憐れみを求めよう。（中略）あなたはわたしの避けどころ、命あるものの地で、わたしの分となってくださいるかた」フランシスコが祈っているうちに、庵の中は真っ暗になった。彼の声がやんだとき、死の静けさが忍びこんだ。この声もう破ることのない静けさが。アッシジのフランシスコの唇

は永久に閉じた。フランシスコは歌いながら永遠の中へ入っていった。その瞬間、庵の上に、不意に高いさえずりが響いた。最後の挨拶を告げたのは聖フランシスコのよき友、”ひばり” でした。

## ヒバリとスズメ

「フランシスコは自分を、ちいさなみすぼらしいスズメだと思っていました。質素な茶色の服を着て、裏町のバルコニーにとまり、貧しい人や病気の人、不幸せな人びとに、チッチッと愛の歌をうたうスズメ。自分もスズメのようでありたい、と願いました。その一方、空高く、自由に飛びまわるヒバリは、祝福の翼にのって、天へのぼる復活のキリストの姿に思え、自分も、いつかヒバリになることを夢みました」（藤城清治著「アッシジの聖フランシスコ」女子パウロ会刊2016年6月）



## 再考愚見

聖フランシスコの伝記を自分の読み易いように5ヶ月に渡って考え書いてきました。もっと詳しく述べたいところが沢山ありますが、多くの著書がありますので、それらを読むための入門篇、又こらからアッシジを旅する方々のガイドになるようにと願ひ多くの引用を伴いながらレイマンが綴る聖フランシスコの伝記を終わります。終わりに際して感想を記したいと思います。

### 1, 1206年の出来事について

私の癖の一つに物語の因果関係を自分の納得の領域に迄持って行く傾向があります。何故、あの段階でフランシスコはハンセン病患者に接吻したのだろうか。それまでの準備はどのようなことがあったのか。繰り返し読んだ伝記には明確な記述はなかったように思い自分なりに考えようとしていました。これは傲慢な読み方だと気づきました。フランシスコ自身にも分からなかった「あの出来事」への道のりは人間の思いを超えた神の意志であると考えなければならないのです。神がフランシスコを聖フランシスコへと導くために一枚ずつそのヴェールを剥いでゆく道のりであったのです。

### (1) 献金態度への自戒から始まる使徒への目覚め

牢獄での生活態度、その後の闘病生活、そして再び騎士を夢みて戦場に赴くも途中で「直ちに故郷に戻れ、なすべきことはそこで示されるだろう」と神に呼び戻されています。放蕩生活にも満足感は得られず、心の混乱から脱するためにローマに赴きます。そこで自分の傲慢な献金態度にぎよっとするのです。

フランシスコは聖書を読んでいましたから次のことばを思い出したかも知れません。

施しをするときには「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意なさい」「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠されたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる」（マタイによる福音書6章①③④）

この自戒から直ちに、施しを受ける者の心情を理解するために乞食になります。そこで得られたことは次のようなことではなかったかと想像します。

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイによる福音書6章④）

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである」（マタイによる福音書6章⑤）

### (2) ハンセン病患者への接吻

フランシスコは小さい者を兄弟と呼ぶようになります。

そして、最も小さい者とは誰か？を自問したのではないのでしょうか。

当時最も社会から疎まれていたのはハンセン病患者でした。彼も時代の人と同様に避けて通っていました。深い自戒の念を持ってアッシジに戻ります。その途中でハンセン病患者の手に接吻することになります。

福音書にはキリストとハンセン病患者の記事がありますから、それを知っているフランシスコの目標「キリストに倣って生きる」が明確になっていくように思えます。

その後の聖堂の修復でポルチウクラ聖堂に続いてハンセン病患者がいた二つの地域の聖堂サンタ・マリア・デリ・アンジェリとサン・ピエトロ・デッラ・スピナ小聖堂を修復します。これはハンセン病患者が聖堂に行きやすいようにするためであったと考えられます。又、弟子になるための条件がすべての財産を処分して施しをすることに加えてハンセン病患者の世話をすることが義務づけられていたようです。

「修道生活に入るための最初の試みは――フランシスコは、自分の修道生活の初めから、兄弟たち（弟子）がハンセン病患者たちの世話をするために病院に留まることを望んでいたのであり、こうして謙虚の土台が据えられるようにした。高貴な人であろうとなかろうと、フランシスコのもとに来る者は誰でも、まずハンセン病患者の世話をし、彼らの家に住むことが要求された」（ベラルド・ロッシ著p74）

## 2、フランシスコも味わったパウロの苦しみ

俗なる世界から聖なる世界へ一直線で進んだのではなく毎日はパウロの苦しみがあったと想像します。特に1208年2月24日迄はその傾向が一段と強いようです。聖書からの引用でその心の情景を表現してみます。

『わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしていっているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです』（新共同訳、ローマ人への手紙7章15節から25節）

### 3, 1208年の出来事・「平和があるように」

主からの召命が決定的に明らかになる日がやって来ました。

それは1208年2月24日サンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂でのミサ中に司祭が朗読したマタイによる福音書10章7-13節のみ言葉でした。

「行って『天の国は近づいた』と<sup>の</sup>宣べ伝えなさい。

病人をいやし、死者を生き返らせ、らい病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。だだで受けたのだから、だだで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。

旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。

町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。

その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる」（新共同訳より引用

このみ言葉をフランシスコにとっては神の啓示と感じました。回顧録によると「いと高い者ご自身がわたしに、わたしが福音に従って生きるべきことをお示しになった。主はわたしに主の平和を与えられるようにと言う挨拶をお示しになった」と記されている。彼はそれを受けて「これこそ、わたしが望むことだ。これこそ、わたしが求めていたことだ。心から憬れていたことだ。できるだけ、そのとおりに生きたい」と興奮して叫んだとされています。フランシスコの理念「使徒的生活」「キリストに倣った生き方」が確立した記念すべき日となりました。

フランシスコの弟子の決定の仕方は福音記事に類似しています。平和を実現する方法である無所有も徹底して実践されます。「所有すれば、それを守る為に戦いが始まる」と何度も司教や司祭に説明しています。クララを向かえるときにもクララの財産（相続権）を適切な価格で処分し、貧しい人々に施して頭髪を切っています。無所有の目的は「平和」です。個人の平和とは「神にすべてを委ねる」心の平穏です。平和の原点を個人の心においています。20世紀に作られたと言われます「平和の祈り」がフランシスコの考えによく似ているところから、最近までフランシスコの祈りと言われていました。

### 4, 聖フランシスコの信条、「従順、祈り、共に喜ぶ」

この信条が平和の実現に必要なだと強調しています。

その後弟子を得て宣教活動が始まりますが、人間の社会はキリストの時代と変わることなく罪に満ちています。そのような中であっても平和の実現を祈る聖フランシ

スコの生き方を見ますとパウロ書簡の一つ「フィリピの信徒への手紙」が浮き彫りになります。恐れおののきながら抜粋して記します。  
弟子たちへのメッセージであり、かつフランシスコの歩んだ道でもあります。

キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。

わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証ししてくださいます。

わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。

何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。

だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であったように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。

あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。

何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。

そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つでしよう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄ではなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。更に、信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際に、たとえ

わたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。同様に、あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい。

わたしの兄弟たち、主において喜びなさい。同じことをもう一度書きますが、これはわたしには煩わしいことではなく、あなたがたにとって安全なことなのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたに見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。

自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。

兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。

兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。

なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。

あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。

そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。

わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

(新共同訳聖書 フィリピの信徒への手紙1章～4章抜粋)

煩わしい他言は不必要ですが、敢えてつけ加えますとこの書簡に二人の婦人という言葉が出てきますが聖フランシスコにも弟子となったクララとジャコマの二人の婦人がいました。1000年の隔たりのある書簡が聖フランシスコの生涯に驚くほど呼応します。それほどに聖フランシスコは使徒的生活をしてきたのです。

## 5、最晩年の「太陽の賛歌」

弟子エリアが告げます「師の命は後2年です」と。

最晩年のフランシスコの健康状態、肉体的な苦しみは読んでいても胸が痛くなりますが、そのような状況の中でも喜びと神への賛歌を忘れませんでした。繰り返えになりますが、もう一度「太陽の賛歌」をベラルド・ロッシ著から引用します。

ベラルド・ロッシは源泉資料からこの歌は15小節からなっていると分析しています。最後の二つの小節は後に加えられたことは本文の通りです。

『被造物の賛歌』

- (1)いと高き、全能の、善き主よ、あなたにこそ賛美と、栄光と、誉れと、あらゆる祝福がささげられますように。
- (2)至高なる方、あなただけが、それに値する方。あなたの名を呼ぶにふさわしい者は誰もいません。
- (3)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、あなたが造られたすべてのものたちによって。なかでも、真昼の輝きで、自分を通してわたしたちを照らす兄弟なる太陽によって。
- (4)太陽は美しく、偉大なる輝きであたりに光を浴びせ、いと高き方、あなたの似姿のよう。
- (5)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、姉妹なる月と星々によって、あなたは、彼女らを、清らかに貴く光るように天に散りばめられました。
- (6)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、兄弟なる風と、大気と、雲と、晴天と、すべての気象によって、あなたはこれらを通してあなたが造られたものたちに糧をお与えになります。
- (7)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、姉妹なる水によって、水は有益で、謙虚で、貴く、貞潔。
- (8)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、兄弟なる火によって、これによってあなたは夜を照らされます。火は美しく、朗らかで、たくましく、力に満ちています。

- (9)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、姉妹なる、母なる大地によって、大地はわたしたちを養い、治め、色とりどりの花や草と共に多くの実を実らせます
- (10)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、あなたへの愛によって人を救し、病気と苦難を耐え忍ぶ人々のために。
- (11)平和な心でそれらに耐える人々は幸い。いと高き方、あなたから栄冠を受けるからです。
- (12)わたしの主よ、あなたこそ賛美されますように、わたしたちの姉妹なる肉体の死によって。生きていけるいかなる人間も、死から逃れることはできません。
- (13)死に値する罪のうちに死ぬ者は不幸。
- (14)あなたのいとも聖なるみ旨のうちにある人は、幸い。この人は、第二の死を被ることがないからです。
- (15)わたしの主をほめたたえましょう。主に感謝し仕えましょう。深くへりくだって。

この歌は病に苦しみ弟子たちとの葛藤を抱えた中で生まれたものでした。考えの異なる弟子たちに、自分の心を語るように「あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます」と祈りながら生まれた歌です。どんな時にも「喜びなさい」を死の床においても成し遂げたのが聖フランシスコでした。

## 6、「二度とない人生だから」坂村真民先生と聖フランシスコ

真民先生も聖フランシスコを尊敬して多くの詩を作られています。

「詩国」第500号（最終号）の後記に是枝律子さんからの手紙が紹介されています。「フランシスコが小鳥たちに説教すると、小鳥たちが静かになったという場所に立ち、大きな絵をみあげていると、真民先生と重なり、日本のフランシスコだと思いました」真民先生は清貧の詩人とも言われ「捨」を実践された人でした（是枝さん50歳のとき日本での看護職を辞めマザーテレサのもとで働き始めた人です。ここから第二の人生が始まりました。マザー・テレサの活動する現場で必要とする医療品その他や、献金を届けることにした。年に1回から3回のペースで、37回にわたり、仲間といっしょに物資や献金を送り続けました。この間、同行した仲間たちは500人にのぼるといいます）真民先生の「二度とない人生だから」の詩を掲げます。「太陽の賛歌」と共に味わってみたいと思います。

### 二度とない人生だから

二度とない人生だから、一輪の花にも、無限の愛を そそいで ゆこう

一羽の鳥の声にも、無心の耳を、かたむけてゆこう

二度とない人生だから

一匹のおおろぎでも、ふみころさないように、こころしてゆこう

どんなにか よろこぶことだろう

二度とない人生だから

一ぺんでも多く、便りをしよう、返事は必ず 書くことにしよう

二度とない人生だから

まず一番身近な者たちに できるだけのことをしよう

貧しいけれど、こころ豊に接してゆこう

二度とない人生だから

つゆくさのつゆにも めぐりあいのふしぎを思い 足をとどめてみつめてゆこう

二度とない人生だから

のぼる日しずむ日 まるい月かけてゆく月 四季それぞれの 星々の光にふれて

わがこころを あらいきよめてゆこう

二度とない人生だから

戦争のない世の 実現に努力し そういう詩を 一篇でも多く 作ってゆこう

わたしが死んだら あとをついでくれる 若い人たちのために

この大願を 書きつづけてゆこう

## (7)弟子たちの役割

聖フランシスコを今日に伝えたのは最初の弟子たちの勇気ある行動でした。特に弟子エリアは師の反対を超えて大聖堂をつくりました。然し聖フランシスコの考えは忠実に守り次の世代に伝えました。エリアの偉大さはここに 있습니다。

真民先生の弟子とは誰か？「念すれば花ひらく」の碑は海外に36碑、

国内に701碑（全都道府県）に 있습니다。この運動を推進した人がいます。

又、愛媛県伊予郡砥部町には坂村真民記念館があります。真民先生は大きな記念館には生前反対をされていました。聖フランシスコの物語に似ています。

「わたしが死んだら あとをついでくれる 若い人たちのために

この大願を 書きつづけてゆこう」と多くの平和の詩を作られた真民詩の真髓を伝えるのは誰か？わたしは今、沈黙と真実の狭間でそれを見極める所に立っています。

思わぬ結末になってしまいました。全く予期せぬことどころか、完全に放棄した課題が私に戻ってきました。それを受け入れる決断をしました。数カ月かかりますが完成の暁には掲載し記録に留めたいと考えています。

## 参考文献

- (1)キアラ・フルゴニ著「アッシジのフランシスコ」 白水社刊
- (2)武田友寿著「聖者の詩」(わがアッシジのフランシスコ) 聖母文庫
- (3)川下 勝著「太陽の歌」(アッシジのフランシスコ) 聖母文庫
- (4)石井健吾訳「アッシジに聖フランシスコの小さき花」 聖母文庫
- (5)藤城清治著「アッシジの聖フランシスコ」 女子パウロ会刊
- (6)ヨハンネス・ヨルゲンセン著「アッシジの聖フランシスコ」 講談社
- (7)ヨハンネス・ヨルゲンセン著「巡礼の書」 中央出版社
- (8)N カザンツァキ著「アッシジの貧者」 みすず書房
- (9)ベラルド・ロッシ著「聖フランシスコとその時代」 サンパウロ刊
- (10)マルコ・バルトリ著「聖クララ伝」(沈黙と記憶のはざままで)  
サンパウロ刊

聖書 日本聖書協会刊 新共同訳

本稿は7月から10月に掲載しました「アッシジの聖フランシスコ」4回分に11月号を加え、以前の誤りを訂正したものです。わたしの知識は浅薄で参考文献の読解力も行間が読めずに理解が進まず結局10冊を読むことになりました。伝記の多様性、翻訳の表現によってニュアンスが異なってくることを学びました。特に800年も前の偉人ですから、何代にも渡って源資料が解釈されているわけで、しっかりした源資料を残さねば真実都合で抹消されます。個人的人格に及ぶ伝記ですから沈黙すべきところもあります。不都合なところは沈黙されるのが歴史ですが、伝記にもおなじ事が言えるようです。そういう点では沢山の伝記がある聖フランシスコ伝はかなり深く個人の内面にまで迫っていると感じます。聖人が聖人と呼ばれるのは「俗」から「聖」への転換が後世の人々の心を動かし共感が生まれ希望を勇気を読者に与え続けるからだと思います。聖フランシスコの場合は、兄弟と呼んだ弟子たちの協力が語られるところに魅力があります。一人のカリスマの歴史で終わっていない弟子たちの働きが事実を真実たらしめているように感じます。

## アッシジ案内

アッシジはウンブリア州の中心に位置するモンテスバジオ山麓の丘の上標高500メートルに位置する小さな街です。2000年、ユネスコ世界遺産に登録されています。

場所がフィレンツェとローマの中間付近にあるため、途中の行程で宿泊する予定がなくても、ほとんどの場合はアッシジに必ず立ち寄っていくという中部イタリアを代表する観光地です。個人で訪れる場合は、鉄道駅が街から離れていて一見不便にみえますが、通年観光客の絶えない街であるため、オフシーズンとなる冬場でもそれほど移動に支障はないと思われます。事前にしっかり行程と移動方法を組み立てておく必要はあります。

街の歴史は、大変古く、古代ウンブリアの中心地として栄えた後、ローマ時代には重要都市として華やかな役割を果たしています。

この町が有名であるのは、サン・フランチェスコ San Francesco（アッシジの聖人、1182年—1226年）の誕生とその生涯の活動によりアッシジはキリスト教が繁栄する世界的にも重要な聖地の一つへととなりました。清貧の教えを貫き、聖人の死後には荘厳な大聖堂が建立され、内部はチマブーエ、ジョット、シモーネ・マルティーニなど当代きっての画家たちが華々しくしのぎを削り、競い合いながら珠玉のフレスコ画を次々と制作し、その結果アッシジはイタリア宗教芸術の宝庫ともなっています。

現在も、街ではサン・フランチェスコの名のもと様々な平和活動が行われており、平和の都市としても重要な役割を担っています。毎年秋には平和への行進la Marcia della Paceという行事が開催され、世界中から人々が終結しペルージャからアッシジを目指して共に行進、平和の願いを世界中へとアピールする上で重要な機会となっています。また巡礼の地としても信者が集う場所となっています。

